ACE TEITOKU　THE INFINITY SKYS　鬼神、亡霊、そして死神

オメガ11

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

激戦を生き抜いたパイロットの新たな職業とは!?

目次

挨拶と設定 ―― 1
Mission01　張り子の基地 ―Sitting Duck― ―― 4
Mission02　Far Eastern Front「極東戦線」 ―― 10
ACT・3　訓練 ―― 15
ACT・4　交流 ―― 18
ACT・5　究極の空軍ドリフト ―― 20
Mission06　SHATTERED SKIES ―― 24
ACT・7　鎮守府強化 ―― 30
ACT・8　呉鎮守府航空祭 ―― 40
ACT・9　帰省 ―― 49
Mission 10　OPERATION BUNKERS HOT ～バンカーショット作戦～ ―― 62
Mission11　三本線 ―― 69
Mission12　カメラ・スプーク ―― 74
ACT・13　カッコカリ ―― 82
ACT・14　ヤセンカッコイミシン ―― 89
Mission15　《目標に高エネルギー反応!》 ―― 98
Mission16　Aquila ―― 101
Mission17　Another No. ―― 105
ACT・18　記憶を辿り ―― 116

挨拶と設定

設定とかもろもろ

・世界観

実際の世界地図にエスコンの世界が混ざりこんでる、つまりアメリカもユージア大陸も登場します

この先の設定は話の進みに合わせてアプデしていくのでよろしくお願いします。

人物、機体、兵器紹介は本編中でやりますがまずはここで主人公の紹介を

・土屋　拓海

徳島出身。幼少期に家族を火災で失い、近所の和菓子屋を営む老夫婦に育てられる。申し訳なく感じた彼は中学卒業と同時に近所のラジコン仲間が経営する小さな輸入雑貨の営業マン見習いとして入社する。最初の大仕事は、「ウスティオに支社を作りたいから偵察に行ってくれ」であった。１９９４年、彼は単身ウスティオに飛ぶ。しかしその直後、ユリシリーズが発見され、経済が混乱。本社が倒産し、さらにベルカ戦争開戦により帰る手段を喪失。彼は仕方なく１６歳にして少年兵として空軍に入るが、戦時中なので撫で斬りの即席訓練を受け、出撃。その後鬼神と呼ばれるパイロットに成長する。戦後はノースポイントに移住、豆腐店の配達バイトで細々と暮らすが大陸戦争で徴兵され、後にリボン付きの死神の二つ名を得る。カティーナ作戦終了後、ＩＳＡＦ展示飛行チーム、「リボン・オブ・アローズ」隊長と教官、アグレッサー隊長として活動したのちにサンド島へ移住、環太平洋戦争に巻き込まれてラーズグリーズの亡霊と呼ばれる。

そして２０１２年、太平洋に落下したユリシリーズから謎の生命体（？）が現れ、人類を攻撃し始めていた。これらは深海棲艦と呼ばれ、これに対抗するため旧軍の艦の魂を持つ「艦娘」が開発、運用され始めようとしていた。

そんな時彼は小学校時代の友人に連絡を取り、日本に帰国した後の

仕事を探していると伝えると、防衛省幹部の友人は新しく作られる「鎮守府」の提督にならないか、と提案してきた。それを受け入れ、着任しようとした当日・・・

・鎮守府
３０００メートル級滑走路２本と地下と地上両方に巨大なハンガーを持つ。基本的に全員が寮生活となっている。工廠、ドック以外にも娯楽施設やちょっとしたスーパーなんかもあったりする。ちなみに呉あたりの設定。

・豆腐
土屋が嫌いな食べ物。あと銀杏もダメ

・登場予定の空軍のメンメン
・スカイアイ
・メビウス隊の方々
・ウォードッグ隊、ラーズグリーズ隊の方々
・オーカニエーバ
・ガルム２
・ＰＪ
・イーグルアイ

・登場予定の航空機
・Ｆ―４
・Ｆ―１４Ｄ
・Ｆ―１５
・Ｆ―２
・Ａ―１０
・モルガン
・Ｆ―２２
・ファルケン

・Ｆ―１０４
・ＹＦ―２３
・Ｓｕ―４７
・Ｆ―１１７
・Ｆ―８６Ｆ
・Ａ―６、ＥＡ―６
などを中心に改造機も出していきたいとおもマス。

プロローグ
「貴機のチェックを実施し、給油態勢を取れ。」
「給油機まで1マイル」
１０時間のフライトももう半分以上は消化した。給油したらペースアップして少し早めに向かおう。念のため対空兵装をガン積みしているがなるべく敵機には会いたくないものだ。

続く

Ｍｉｓｓｉｏｎ０１　張り子の基地　―Ｓｉｔｔｉｎｇ　Ｄｕｃｋ―

２０１１年９月１９日０９５４時

「やっと終わったのです～」

約１時間後に迫った提督着任に向け鎮守府では慌ただしく準備が進められていた。

航空機で向かうと連絡があったので、エプロンと滑走路を艦娘たち全員で掃除していた。

「うむ、頑張ったな」

着任までの代理を務める長門は第六駆逐隊の４人の成果を褒めていた。

「とりあえず駐機場はこれでいいだろう。あと格納庫のあたりを・・・」

その時、ビッグ７の勘（？）とでも言うのか気配を感じ、大淀に指示を出す。

「大淀、試運転を兼ねて電探を使ってみてくれ」

「はい・・・・・これは!?」

「どうした!?」

「敵大型爆撃機接近！機数は・・・６！さらに護衛機が５！」

勘とはこういう時に限って当たってしまうものだ。

「迎撃機は？」

「出せますがあの高度では間に合うかどうか・・・」

「くそ、提督がいない時に！全艦に告ぐ、対空兵装だけでいい！直ちに準備して射撃開始！」

「了解だ」

「まっかせて！」

「急ぐのです」

「見てなさい！」

近くにいた六駆が答えると急いで艤装を取りに走った。

２０１１年９月１９日０９５０時
「いやー、やっぱファントムは良いねぇ」
土屋はＩＳＡＦ時代の愛機、Ｆ―４Ｅで鎮守府に向かっていた。この機体は外見はノーマルとさほど変わらないが、中身は別物と言っても過言ではないものだった。
エンジンはターボジェットからターボファンに換装され航続距離が伸びている他、機体構造に新素材を多用することで軽量化して運動性を向上させる改造が施されている。さらにサイドワインダー用パイロンの下と外舷ハードポイント（増槽を使うことが多い）にＡＩＭ―５４Ｃ空対空ミサイルを一発ずつ搭載し、それに合わせてレーダーもＦ―３５と同じものを積んでいた。なおレーダーに手直しをすることでフェニックスに対応させている。
つまり対空兵装満載の今はスパロー＆サイドワインダー＆フェニックスを４発ずつ搭載している。
「おっと新たなレーダーブリップ、ＩＦＦ応答なし、深海応答ありか・・・」
ＩＦＦは深海棲艦の航空機を見分ける能力が追加されるのがこの頃は常識だった。
「この方向は・・・俺と同じか・・・て事はヤバくね？迎撃してこないし」
「♪行き先が～たまたまお～なじ～、そんなっこたでしょねぇ～っと」
所ジョージの「旅の犬」を口ずさみながらＡＩＭ―５４Ｃを選択し、大型機に向けて斉射する。同時にアフターバーナーで急加速して距離を詰める。スパローをさらに斉射する。しばらくして大型機の反応が全て消失し、命中を知らせる表示が出る。残りの護衛と思しき５機のうち４機にサイドワインダーを撃ち込み、全弾が命中した。最後の一機も追い越しざまにガンキルした。
「ふう、やはり良い機体だなぁ」
「♪俺を食う気かバカなのかっと」
その頃鎮守府では突如敵機が爆散し、彼女らの記憶にない航空機が

上空を通過したため大騒ぎだった。
「なんだあれは・・・」
「とんでもなく速いですね・・・」
長門とたまたま近くで柿ピーをつまんでいた赤城が話していた。すると艦娘たちが集まってきた。ほぼ全員。
睦月「夕立ちゃんは見たの？」
夕立「音しか聞こえなかったっぽい～」
などと騒いでいる。
すると轟音を轟かせて航空機が近づいてきた。大きさ、音、形、何をとってもレシプロとはすべてが違っていた。
長門「全員1番格納庫前に集合！」
全員が集まると、着陸した機体がタキシングしてきた。彼女らの前に止まる。
「すごい音なのでーーーーー!!!」
「聞こえなーーーい!!」
かなりの声で叫んでも話しづらいほどのにぎやかすぎるエンジン音が段々と小さくなり、エンジンが止まった。
複座機のようだが乗っているのは1人のようだ。前席のキャノピーが開き、男がヘルメットを脱いで降りてきた。
それは事前に配られた書類に写真が載っていた提督であった。
土屋「どうも、今日からここに着任することになっている土屋　拓海という者だ。お騒がせして申し訳なかったが、これからよろしく頼む。好きなように呼んでくれて構わない」
大淀「えーっと・・とりあえずようこそ鎮守府へ。軽巡大淀です。よろしくお願いします。」
土屋「こちらこそ」
赤城「そういえば加賀さん」
加賀「何でしょう」
「あの機体この前どこかで・・・」
明石「これに載ってた機体ですよねえ」
明石が工廠から雑誌を持ってきた。軍用機の雑誌だ。半年ほど前

のバックナンバーで表紙には
「特集　大陸戦争の謎」とある。
その本のあるページを開くと、今目の前にあるのと同じ機体が載っている。ネイビーブルーの機体に機番「１１８」
そして尾翼のメビウスの輪をイメージした部隊マーク・・・
この時、３人の結論は同じだった。
「まさか本人!?」
書類には海自出身と書かれていたはずだ。聞こうとしたその時
「お、来たな」
航空機の集団が見えた。世界最大の輸送機アントノフが３機降りてきた。艦娘たちはその巨体が飛ぶということが理解できなかったようだ。ちなみに積荷はジェット機の運用機材と弾薬である。さらにその後方から黒いＦ―１４Ｄが４機と１機のグレーのＦ―１４Ａ、そして両翼を青く塗ったＦ―１５Ｃと片翼を赤く塗った同型機、それとＦ―１６Ｃが降りてきた。１０分後、空中給油機ＫＣ―４６Ａが１機と背中に大きな円盤を持つＥ―７６７が１機とＦ―２２Ａとタイフーンが４機ずつ降りてきた。

大淀「提督、これは・・・」
土屋「俺が昔乗ってた機体と当時の仲間達だな。みんな元気にしてっかなー」
まあ俺が乗ってた４機を１人で飛ばすのは無理だから代行頼んでるけど、と付け加える。
さらにドリームリフターも到着した。こっちの積荷は土屋の生活用品とクルマである。
パイロットたちが全員降りて彼の前に整列する。
「みんな遠いところをありがとう!ご苦労様。それと代行の方々も本当に助かりました。」
パイロットが自己紹介した後、話しかけてきた。
グリム「隊長、お久振りです。話を聞いたときは何かの冗談かと思

いましたよ」
土屋「ま、俺も食ってかなきゃイカンし。そういえばＰＪ、彼女とはどうなったんだ？」
ＰＪ「ちゃんと結婚しましたよ！」
土屋「つかピクシーもいるのか。心強いな」
妖精「よう相棒、まだ生きてたか」
土屋「生きてちゃ悪いか」
妖精「そうは言ってない」
ω１１「よう」
土屋「お前かオメガ１１、あれから何機潰した？」
などと話していると
大淀「あの・・・そろそろ・・・」
土屋「分かった。あと皆はそこのハンガー横の寮な」
なおチョッパーはスタジアム墜落の寸前で無理やりイジェクトしており、死んだと伝えられたのはパラシュートが風に流された＆周囲の混乱による誤報だった。ＰＪはあの日の翌日彼女さんに頼まれてハインドで救出に行った。

「それで・・・どうしよう・・・」
今執務室には来た。机とかソファとかＴＶとか本棚があるのはいい。でもなぜ「執務室しかない」のか。
答えは実に簡単であった。

工事が終わってないのだ。

「大淀、どうしよ」
「申し訳ありません。お風呂は時間交代制なので問題ありませんが寝

室だけ・・・明日中にはできますが・・・」
「まぁしょうがないか。ひとまず寝袋で済ませr」
と言いかけたとき誰かがドアをノックした。

続く

Ｍｉｓｓｉｏｎ０２　　Ｆａｒ　Ｅａｓｔｅｒｎ
Ｆｒｏｎｔ「極東戦線」

「失礼します、提督さん。演習計画について・・・あれ、何のお話ですか？」
　ドアが開くと鹿島が入ってきた。演習の計画についての相談に来たようだがそれよりもこちらの会話の方が気になるらしい。
「いやー、俺の寝る場所がないから寝袋使うかって話」
「あらら」
「まぁ輸送機で寝るよりかマシだけど」
　その時、警報が鳴り響く。と同時にピクシーとＰＪが飛び込んできた。
「相棒、敵襲だ！」
「爆撃機と護衛機が８機ずつらしいらしいっす！」
　大淀の顔が少し青くなっていた。
　土屋「あー、ファントムは弾薬無いし・・・イーグルで行くか。じゃピクシー、ＰＪ、迎撃するぞ。ＰＪ、お前のコールサインはガルム３だ、急げ。あと放送を・・・あーあー、鎮守府の総員に告ぐー、戦艦組を発見し次第三式弾と対空兵装を整え出撃させろ。秋月と照月と涼月もだ。」
　鹿島「提督さん、空母の方々は・・・」
　土屋「レシプロであの高度まで上がろうとしても間に合うか分からん。俺たちが行く」

格納庫（ハンガー）
　明石がピクシーのイーグルをいじっている。
　土屋「明石、勝手にいじるな」
　明石「あ、新装備のテストお願いしたいんですけど・・・」
「何作ったんだ？」
「大和さんの４６センチ砲にＡＰＦＳＤＳ（装弾筒付き翼安定徹甲弾）

を・・・」
「バカかお前は・・・まぁピクシーが良いなら」
「別に構わん」
胴体下のポッドには「試製４６センチ３連装航空砲Ｗ／ＡＰＦＳＤＳ」と書かれている
弾は真っ直ぐにしか飛ばないらしい。

１分後、２機のＦ―１５ＣとＦ―１６Ｃが１機アフターバーナー全開で離陸していった。
３万フィートで東に向かう。しばらくしてレーダーに敵機が表示された。爆撃機は２機ずつ向かってくる。
「ＰＪ、まだ撃つな。ピクシー、例の物を試してみてくれ。」
ウィルコと２人から返事が来る。
重量の問題でリロードができないため、弾数は砲の数と同じ３発。両端の２門から砲弾が放たれる。爆撃機の正面に命中すると同時に胴体後部からも破片が飛び散る。どうやら貫通したようだ。おおコワ。
２機が撃墜され、動揺しているようだった。
「ＰＪ、ピクシーの掩護に当たれ。ピクシーは爆撃機を、護衛機は俺がやる。全兵装（ウエポン）の使用（ズフリー）を許可する。散開！」
編隊をブレイクしそれぞれの方向へ向かう。距離があるうちに護衛機を片付けるため、スパローを４発発射する。全弾命中し、護衛機が半分に減った。敵はジェット機ではあったが「かろうじてジェットで飛べる」といったレベルの黎明期の機体と変わらないらしい。すれ違いざまに２機をガンキルし、９Ｇで旋回、後ろに付く。サイドワインダーで最後の２機を倒す。手応えが無さすぎる。
「各個の判断で目標を攻撃せよ。交戦（クリアードエンゲージ）を許可する！」
ピクシーが４６センチ砲で１機、さらにミサイルで２機撃墜し、ＰＪも２機（そのうち１機はピクシーと共同）倒していた。最後の１機は全員で残弾を叩き込んであっけなく墜ちた。

大淀「提督！ご無事ですか？」
土屋「ああ、弾バラ撒いてきただけだ。明石もありがとな。あの武器なかなか使えるな」
ピク「機動目標でなければだけどな。」
ＰＪ「相変わらずの飛び方っすねぇ、サイファー」

念のため出ていた艦隊も戻っていた。
秋月「お疲れ様です、司令」
土屋「あー、みんなゴメンな、無駄足踏ませちゃって。あと大淀、もうすぐ輸送機と輸送船団がまとめてくるから。」
「何か来るんですか？」
「航空機と資材、それと諸々の兵装だな」
「了解しました。」
「それと空母組の艦載機の生産を中止させてくれ。」
「ええっ、なぜです？」
「ジェット機を大量に購入するから。あと空母組集めてくれ。話がある」

～１０分後～
蒼龍「提督の話って何だろね～」
飛龍「さあ・・・」
土屋「集まったな、では早速本題に入る。単刀直入に言う。これより空母、軽母組は全艦ヘリとジェット戦闘機を運用してもらう。水母・航巡・航戦組はヘリとＶＴＯＬだ。」
全員「!!!」
土屋「まずは明日から訓練を行う。ひとまず回転翼機訓練はＯＨ－６を、ＶＴＯＬは英海軍から譲渡されたシーハリアーを、空母組はＴ－４５でやってもらう。いずれも小型でパワフルとは言えないが最初のうちはこれでいいだろう。なおこちらの方々にもご協力頂く。

ブリーフィング担当の轟教官と訓練中の指導を担当するサワダ教官だ。あとで挨拶しとくように。以上、解散！」

長話が苦手なので手短に伝え、さらにその他の駆逐など全員にも数機ずつヘリかＶＴＯＬを積んでもらうように伝えた。

～夕方～

夕食を済ませ、書類をチェックする。好きなテナントが選べるのでその申し込みと娯楽室に置くものを選べるらしい。というわけで選んだ結果

テナント

・タミヤプラモデルファクトリー
・ローソン
・はなまるうどん
・ココイチ
・若鯱屋
・吉牛

娯楽室

・電車でＧＯ（アーケード版）
・リッジレーサー
・セガラリー
・アフターバーナー
・エアーコンバット
・イニ？
・湾岸ミッドナイト
・スーパーハングオン
・アウトラン
・ミニ四駆コース
・ＲＣコース
・卓球台

・ＳＷＤＣ
・マッハストーム
・太鼓の達人
などなど懐かしのゲームから最新作まで幅広く注文した。ちなみに一部のゲームは常に最新の状態にアップデートされる。

「これで良しっと」
一通り確認して大淀に渡す。そのまま書類を持って帰って行った。これで今日は終業時刻だ。メビウス隊のタイフーン組に夜間のアラート待機を命じ、風呂に入る。翌日の準備をして、持ち込んだＰＳ３でグランツーリスモをやる。２時間ほどやった所で誰かがドアをノックした。
土屋「ハイハイ、開いてるぞー」
??「ちーっす、提督ぅ、寝るとこ無いんだってぇ？ベッド用意できなくも無いんだけど～」
鈴谷が入ってきた。さっき食堂でいろいろ話した子だ。
「マジで⁉めっちゃ助かるんだけどベッドここに持ってくるのはムリじゃないか？」
「ふっふーん、まっかせて！用意できるから。ほらほら、早く来る！」
「あ!!!!」
鈴谷がＰＳ３の電源をブチ切った。
「あぁぁぁぁぁぁぁー!!!!せっかくあと２周で鈴鹿１０００キロ（１７２周）がクリアできたのにぃぃぃ!!!!」
「あー・・・えと、ゴメンね？」
「まぁすでにクリアしてるからいいけどさ・・・とりあえず行くか、どこなんだ？」
「いいからいいから」

続く

ＡＣＴ・３　訓練

暗い廊下を２人で歩く。しばらくすると鈴谷がある部屋を指差した。
「ここか？」
「うん。中は割とフツーだよ。」
多少の生活感はあるものの比較的きれいそうな部屋だが、いかんせん暗いのでよく見えない。ベッドと思しきものを半ば手探りで見つけて腰かける。
「ほんとに良いのか？というか何の部屋だ？」
「さあ何でしょう？とりあえず寝る寝る！」
ひとまず布団に潜り込む。初日ですでに２度交戦したため疲れてすぐ寝そうになる。しかしそれどころではなくなった。鈴谷がなぜか布団に入ってきたのである。

っておいおい!!
不味いだろそれは！
「おい、何してんだ？」
「何って、鈴谷も寝るから」
「一緒でなくてもいいだろ」
「だってここ私の部屋だもん。あといろいろ聞きたいことあるし」
何だ聞きたいことって・・・
「ねぇ、提督はさ、何者なの？海自出身って聞いてたのに戦闘機乗れるしおまけに仲間のパイロットもいるじゃん？」
ああ・・・そういうことね・・・・
というわけで全てを話した。分からない人は設定を読みましょう。
「・・・・・というわけだ」
「へぇ・・・いろいろ大変だったんだねぇ」

「でもここにいる皆の方が方が大変だと思うぞ」
「何で？」
「俺は人間を相手に戦っていた。でもここは違う。実体がよくわからない奴らを相手する必要がある。相手に関して何も分からないのが一番の違いだな。とりあえず寝させてくれ」
そのままネタ、もとい寝た。

翌朝

見事なドラクエ睡眠だった。食堂で簡単に朝食を済ませ、執務室へ向かう。今日は駆逐や軽巡達にヘリとＶＴＯＬの訓練をさせる。

「これより、回転翼機基本運用課程の訓練を行う。最初の訓練はホバリングだ。ヘリ甲板上、離陸開始位置から訓練を開始する。まずはコレクティブを操作し、機体を対地高度１０フィートまで上昇させる。１０秒間のホバリングの後、着艦。この時、開始時と同じ位置に降りることと、昇降計が０から１に収まるようにゆっくり降りることが重要だ。勢いよく降りるとスキッドを傷める可能性がある。空中で機体が滑る場合はサイクリックで調整しろ。大切なのは、「初動を掴む」と「半量修正」だ。大きく乱れる前にわずかな変化を感じ取り、まずはそれ以上乱れないようにすること。そして修正するときは自分が必要と感じた操作量の半分の操作量で対応し、足りなければまた半分、というようにすること。ホバリングは基本でしかない。きっちり出来るようにしろ、以上だ」

サワダ「コレクティブを上げて発艦しろ！対地高度１０フィートでホバリングだ！・・・・・あと５秒だ、がんばれ！・・・・フラフラするな！・・・・よし、着艦だ。昇降計に注意しろ」

水雷戦隊のメンメンが順に甲板からＯＨ―６をホバリングさせる。苦戦する場面もあったが夕方には全員ホバリングは完璧になった。

その後２週間かけて基本操縦、さらに１週間かけ戦闘操縦を、そして同じ日程でＶＴＯＬの訓練も行った。全員に小さめの甲板を持たせ、航空戦力の大幅な拡充が行われた。空母組のジェット機の訓練も同時進行で行い、何とか新しい航空隊が発足した。

ＡＣＴ・４　交流

訓練が順調に進んでいるので、今日は休みだ。ただし非常時に備えガルム（ＰＪとピクシーの２機）隊をアラート待機させている。
とはいってもやることが無いので、敷地の隅でＩＳＡＦに入る前に豆腐屋で配達をしていた頃に店長にもらった白黒のＡＥ８６（ＴＲＤグループＡ仕様をベースにチューンしたもの）トレノをいじっていた。眩しくないように黒く塗っただけのボンネットとリトラクタブルライトのカバー、プロペラシャフトをカーボン製の物に交換していた。
作業が終わると、今度は洗車を始める。カーボン製のエアロパーツからホイール、リトラクタブルライトに至るまで舐めるように洗っていく。もちろんミラーやウィンドウも丁寧に拭き上げる。作業中にオイル交換をしようとしたのだが缶にオイルがほとんど無かったので後で買いに行こう。ついでにバッテリー交換もしなきゃなので一緒に買わなければ。一通り作業が終わって片付けようとしたとき、声をかけられた。
「あ、司令」
「おおどうした秋月」
「お休みなので朝の散歩を・・・」
秋月と照月と涼月の３人だった。
「提督は何してるの？」
「久しぶりにクルマいじって、あと洗車してってとこだな・・・そうだ、お前ら行きたい所あるか？買い出し行くから連れてってもいいけど」
「それじゃあこの前できたイオ○行きたいです！」
イオ○か・・・そういえばこの前できたって聞いたけど山を２つ３つ越えた先って聞いたからクルマじゃないとムリだよなぁ・・ジェー○スと同じ方向だしいいかもな・・・
「いいよ、ちょうど同じ方向だし」
「やったぁ♪」
「そんじゃ私服に着替えてきな。制服じゃ目立つ。」

「了解です、司令」
３人がダッシュで寮に向かった。その間に片付けして財布やら何やらを用意しておく。
～１０分後～
「お待たせしました、司令！」
「よし、そんじゃ後ろから順に乗って。助手席がスライドしないから気を付けて乗れよ」
そう、ハチロクは４人乗りなのだ。そして後部座席もなかなかに広い。
そう、ノーマルならば。
ノーマルならば。
全ての座席をレカ○のバケットシートにして、さらに軽量化、低重心化のためスライドレールを撤去しているのでシートが固定式なのだ。なお内装パネルほとんど無し＆ロールゲージ入りなので慣れてないと乗り降りしづらい。
「痛！・・・頭打ったぁ」
「おい照月大丈夫か？」
「だ、大丈夫・・・」
「乗ったらベルトしろよー」
全員乗ったのでエンジンをかける。グループＡ仕様をベースにチューンしたことで１万３千回転を可能にした１．６Ｌの４Ａ―Ｇが目を覚ます。アイドリングが２千回転前後なので音が大きい。
「結構凄い音ですね、司令のクルマ・・・」
「まぁレース用のエンジンだししょうがない。悪いね」
山を２つ越えてさらに高速走れば着くはずだ。ローに入れて半クラッチを使いながら発進する。
現地まで１時間ちょっとかかるので楽しもうっと。

ＡＣＴ・５　究極の空軍ドリフト

鎮守府を出てしばらくした頃、４人を乗せたハチロクは一つ目の山を越えて二つ目の山に差し掛かっていた。横で秋月がお○いお茶を飲んでいる。後ろの２人はのんびり外を眺めている。ふとミラーを見ると、後ろからＲ３５ＧＴ―Ｒが追いついてきた。登坂車線があるのでそっちに入ると、並走してきた。アホそうな男が乗っている。声をかけてきた。

「おーい嬢ちゃんら、そんなブサイクな奴じゃなくて俺と出かけようぜ」

照月を中心に困惑しているようだ。

「ほっとけあんな奴」

それからしばらく罵声を浴びせてくる。いい加減腹が立ってきた。

すると・・・

コツン☆

バンパーをつついてきた。

ブチッ（#^ ∀^）ゞ ｏゞ

「あ・・・あの・・・・司令？お、落ち着いてください！」
「俺をバカにするのはまあいい。だがなぁ、クルマまでつつかれちゃぁこっちもこっちもガマンできねぇなぁ!!」
「てめぇみてーなカスにはぜってー負けねぇからなぁぁぁぁ!!!!」

素早くセカンドにシフトダウンしてアクセルを踏み込む。１，６Ｌ

の４Ａ―Ｇが唸りを上げ、急加速する。
「ちょちょちょっと提督!?」

この先の緩い右コーナーからのキツい左コーナーを抜ければダウンヒルに入る。そうすればこっちのものだ。
右コーナーに慣性ドリフトで突っ込み、フェイントモーションで左コーナーにアプローチする。大きくクルマを振って曲がる土屋の走りで秋月型の３人には怯えるかフリーズするかの２択であったが、本人はそんなことは気にせず前を行くＧＴ―Ｒを猛追する。下りに入って５つ目の高速左コーナーで追いつき、そのままこの山で最大の難所、トンネル（下り勾配）～下りながらの左ヘアピン～さらに下って～右ヘアピン～中速Ｓ字の連続コーナーに突っ込んでいく。一つ目の左ヘアピンのブレーキングで並び、コーナリングで一瞬前に出るも立ち上がりで並ぶ。僅かなストレートを挟んでの右ヘアピン。ブレーキングで前に出ると、そのまま完璧なブレーキングドリフトに入る。そして完璧なコーナリングは立ち上がりでパワーをフルに使い切って加速させる。中速Ｓ字を抜けた時、突然ＧＴ―Ｒが消えた。見るとＳ字の２つ目でコンクリートウォールに突っ込んで出火していた。
「ざまぁ」
「こ、怖かったぁ」
「ゴメン。あとでお詫びに甘いものでも奢るよ」

～４０分後～
イオ○到着。３人は服が欲しいと言ってたのでまず服を探す。それからコ○ダでお茶してから食料品の買い物、あと雑貨の店なんかをのぞいて、家路につく。途中でジェー○スに寄ってカス○ロールのオイルを缶で購入。それと予備のバッテリーもしっかり調達してきた。

～帰り～
涼「提督、今日はありがとうございました」
土「皆も楽しかったか？」

秋「はい！」
照「うん！」
帰りは丁寧に運転する。さっきＧＴ―Ｒが事故った辺りには砂が撒かれていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ０６　ＳＨＡＴＴＥＲＥＤ　ＳＫＩＥＳ

さて、ついに実戦らしい。先ほど作戦命令が防衛省より届いた。航空部隊と艦隊がブリーフィングルームに集まっている。

「ブリーフィングを開始する。先程、防衛省を通じて当鎮守府に出撃要請が来た。今回は占領されている沖縄本島手前までの偵察任務だったが、状況が変わった。これからの作戦を支援する偵察衛星を、種子島宇宙センターより打ち上げる。　それを察知した敵は、打ち上げを阻止するため多数の制空戦闘機を送り込んできた。　大規模な空戦になることが予想される。この空の戦いに打ち勝ち、制空権を守り抜く。

打ち上げのチャンスは今しかない。１機でも多くの戦闘機を撃墜し、宇宙センターを防衛せよ。　なお、ジェット戦闘機部隊は訓練が完全な状態のパイロットのみを加賀に乗艦させ、同時に編成する蒼龍と瑞鶴には馴染みのあるレシプロ機を使ってもらう。加賀の搭載機は、汎用性に優れ比較的小型のＦ／Ａ―１８Ｃだ。まずはこれで慣れてもらう。艦隊には、対空射撃で航空機を援護する任務も与える。そのため、秋月、由良、鈴谷を護衛を兼ねて編成する。それと、今作戦には、ウチのエースも参戦する。パイロットの諸君、金と名声が欲しければ、ウチのエースを抜くことだ。それと加賀」

「はい」

「戦闘の意味を述べてみろ」

「は、はい。我が意志達成を敵に強要することを目的とした実力行使・・・・です」

「よし、それが分かっていれば問題ない。今回の作戦で２つのことが明らかになる。１つは敵の空対空戦闘能力。そしてもう一つは奴らが戦闘という行為の意味を理解しているかどうか・・・だ。では解散！」

～志布志湾沖合～

ｓｉｄｅ加賀

そろそろ発艦地点だ。エースとやらは鎮守府から直接飛来するらしい。

「ここは譲れません」

「攻撃隊、発艦はじめっ！」

「第一次攻撃隊。発艦始め！」

「さてさて、やっちゃうよ！」

次々と発艦していく。私の機体はあむらーむ・・・？とかいう武器で遠くから攻撃できるので、開幕で数を減らすことができる。２９４機（Ｅ―２Ｃ一機含む）の大編隊が戦場に向かって行った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

呉鎮守府ハンガー

５機の黒いＦ―１４Ｄがエンジンを始動し、エプロンに出た。新生ラーズグリーズ隊だ。編成は

・１番機　ハートブレイクワン

・２番機　エッジ

・３番機　チョッパー

・４番機　ソーズマン

・５番機　グリム

これはブレイズこと土屋が指揮のために離脱したからだ。

《こちら管制塔、離陸後は高度３万フィートで南西に向かってください。クリアードフォーテイクオフ、離陸を許可します》

アフターバーナーを焚いてＦ―１４Ｄが離陸していく。土屋は司令室の窓からそれを眺めながら「燃料が消し飛ぶなぁ」と遠い目をしながらつぶやいた。

～種子島付近～

《こちらＡＥＷ、コールサインはサンダーヘッド》

（作者注：艦上運用のためサンダーヘッドはＥ―２Ｃに機種転換しました。）

≪種子島ベースより作戦遂行中の全機へ。打ち上げのチャンスは今しかない。ロケット発射まで制空権を守ってくれ。≫
「か、加賀さん・・・」
「何？蒼龍」
「さっき無線で敵機が１９００機くらいいるって報告が・・・」
〈こちら鎮守府の土屋だ。蒼龍、この時代に至ってまだ物量の神話を信じているのか？〉
「え？」
〈戦闘において必ずしも1プラス1が2ではない。もちろん5にも10にもなりうるが、1プラス1が1になることもあるのだ。覚えておくといい。〉
「りょ、了解！」
≪種子島ベースより作戦遂行中の全機へ。打ち上げのチャンスは今しかない。ロケット発射まで制空権を守ってくれ。≫
≪こちらスパロウ1、タリホー、ＦＯＸ３！≫
≪ターキー2、エンゲージ！≫
≪間違えて味方を撃つなよ。≫
≪この状況じゃあ、いちいち撃墜確認は無理だ。≫
≪すごい数だな。≫
ホーネットのアムラーム搭載数は１０発。上げた機数は定数９８機からＥ―２Ｃを一機引いた９７機だから９７０発。いくつか外してもサイドワインダーで対処できる。そもそもミサイル無しでも性能には大きな差がある。
「こちらサンダーヘッド、アムラーム、目標到達！」
レーダーの点が一気に減る。あと１０００機もいないが、さらにサイドワインダーで数を減らし、残りは８００機少々だ。
「す、すごい・・・・」
〈クソ、ドイツニヤラレタンダ？イマオレヲウッタヤツヲカクニンシテクレ。〉
〈ワカラン！〉
≪相手は対空兵装しか積んでないぞ≫

≪全管制官へ。打ち上げ最終チェックを急げ。≫
超音速で突っ込むホーネットは機首のＭ６１バルカン砲を放つ。その発射速度と砲弾で異形の敵機は一瞬にして粉になる。ヒット＆アウエイで戦うが１回で２機以上墜とすこともあり、あっという間に数が減った。しかし、機関砲は発射率が毎分６０００発前後と非常に高く、弾数は７００発もないので合計で１０秒ほどしか撃てない。そのため、弾切れした機体が順番に補給のために帰投を開始する。そして鈴谷のシーハリアーがサイドワインダーで４０機ほど墜とし、３０ｍｍ砲でさらに落としていくが、弾数が少ないのでこちらもすぐに退却した。まだ５００機近く残っているが、本命のレシプロ部隊とエースが来るはずだ。
≪なんだ、この数は？俺様の想像力を上回るとは、どうなってんだ。≫
≪さっさと片付けるぞ、こんなチョロい機動にてこずってるんじゃねぇ。≫
Ｆ―１４Ｄから放たれたＡＩＭ―５４ＣとＡＩＭ―９が炸裂する。４０発全弾が命中し、続いてＭ６１が唸りを上げる。赤い光で白い球体の敵機は消し飛ぶ。弾数が尽きるまでにかなりの数を落とした。ラーズグリーズ海峡の亡霊達によって残りは４００機ほどになった。やはりエースは違う。続いて九六・零式艦戦が突入し、空戦が行われる。数で劣勢だったが、「鬼神」や「死神」や「亡霊」に空戦の極意を徹底的に教え込まれたパイロットによってそれも覆された。全ての戦闘機を撃墜したところで、ほぼ全機が弾切れで帰還した。その時だった。無線が入る。
≪こちらホークアイ。西から爆撃機が接近中。発射基地へ到達する前に撃墜せよ。≫
〈〈テキノセントウキガマダイルゾ。ドウイウコトダ。〉〉
〈〈カマウナ。バクゲキニンムヲスイコウスルンダ。〉〉
〈〈モクヒョウヲカクニン。シンニュウコースニハイル。〉〉
≪艦爆・艦攻隊は３号爆弾で迎撃せよ！≫
艦戦を積んだ余剰スペースに少数搭載した九九艦爆と九七艦攻に

３号爆弾を搭載して向かわせる。また、着艦待ちで上空で待機していた艦戦の中から燃料と弾薬に余裕のある機体を護衛に付ける。爆撃機は弾幕で防御してくるが、３号爆弾が炸裂して落ちて行く。１１機のうち１０機墜としたが、艦爆と艦攻が全滅したので最後の１機は艦戦が倒した。

≪発射１５秒前。すべての航空機は安全なエリアへ退避せよ。１０、９、８、７、６、点火開始。３、２、１、点火。　≫

≪おお、いいぞ！≫

≪全システム正常に稼働中。≫

≪ロケットは高度４００００フィートに到達した。もう手を出せないだろう。君たちのおかげで発射は無事成功した。　≫

≪こちらサンダーヘッド、敵艦を目視で発見した。単艦でそちらに向かっている。艦種は・・・・馬鹿にしやがって、戦艦だ。　≫

≪たはーっ、俺たちゃついてねえ。化けもんにばかり大当たりだ。≫

再びホーネットが発艦する。しかし、今回は対艦ミサイルＡＧＭ―８４ハープーンを４発搭載している。３機ほどしか出していないがこれで十分だろう。遠くでハープーンが発射されて白い尾を引くのが見えた。しばらくして報告が入った。

≪対艦ミサイル、主砲に命中。誘爆し敵艦は沈んだ模様≫

「由良の出番かと思ったのに・・・」Ｘ、―ｖ、从ショボーン

「加賀さん、そろそろ帰ろう？」

～鎮守府～

「皆よく無事で帰ってきてくれたな。宇宙センターへの影響は無かったようだ。ロケットは無事発射され、これからの戦いを支援する準備はととのった。　それと加賀、艦載機はどうだった？」

「良かったわ。遠くから攻撃できるし、装備を変えれば何でもできるから未帰還機はゼロだったわ。」

「そうか。まぁこれから別の機体も使うだろうし色々試してみてく

れ。そんじゃ今日は解散。」

ｓｉｄｅ土屋

今日は工廠へ行く。何でも明石が工廠自体が強化されたので見てほしいということだ。ドアに文字が書かれている。

「ん～、何々？『Ａ・Ａ（アドバンスドオートメイテッド）アヴィエーション・プラント』・・・これって親父さんが言ってた南ベルカ国営兵器産業廠の技術か!?」

中に入る。

「おい明石、表の貼り紙はなんだ？」

「ああ提督。この前のオーシアからの輸送船で入ってきた技術なんです。強化型コンピューター数値制御工場で、航空機が量産できますよ。」

ジェット機の導入が遅れ気味なのは否定できないので許すことにした。どのみち今からではこれだけ立派な設備を撤去するのは無理だ。

変なモノ作らなきゃいいんだが（フラグ）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ＡＣＴ・７　鎮守府強化

「提督」
「何だ明石？」
「新しい航空機の試作型が完成したのでテストをお願いしたいんですが・・・」
「ほう、どんなんだ？」
「Ｆ―１５ＭＰっていう機体なんですけど・・・
「ＭＰ・・・・？なんだそりゃ」
「マックスペイロードの略です。この前配備された機体の技術を活用して作りました。」
ヤな予感・・・・

数週間前ーーーーー
エプロンにびっしりと航空機が置かれている。というのも国連を通して世界中からかき集め、さらに生産終了した機体も再生産して配備させたのである。なお鎮守府で一部は開発。
えー、これがそのリスト←
輸送／空中給油機
・川崎　Ｃ―２
・Ｃ―１７
・Ａｎ―１２４
・ＫＣ―１０
・ＫＣ―１３０Ｈ
・ＡＣ―１３０
偵察機
・ＭＱ―９
・ＲＱ―４
・ＲＦ―８６Ｆ
・ＲＦ―４Ｅ／ＥＪ
・Ｕ―２

・SR－71
電子戦機／AEW／AWACS
・EA－6
・EA－18
・E－767
・E－2D
・E－3
回転翼機
・OH－6D
・AH－64E
・CH－47
・AH－1Z
・SH－60K
・UH－60JA
・OH－1
・MH－53E
・AIRWOLF
飛行艇
・PS－1
・US－2／1
対潜哨戒機
・P－1
・P－3C
・P－8
戦闘／攻撃／マルチロール機
・F－14D
・A－4
・F－15C／D／E／SMTD／XX
・YF－23
・F－4EJ改／SX
・F－22A

・F－35A／B／C

・A－10C

・TND－IDS／ADV

・タイフーン

・グリペンE

・ラファール

・F－16V

・F－16XL

・F／A－18E／F

・A－6E

・F－4G

・F－117A

・F－2A

・F－2スーパー改

・X－02A／S

・ADFX－01／02

・S－32

・Mig－1.44

・ADF－01

・ADA－01

・CFA－44

・ADF－11F

・F－104G

・F－86F

・F／B－22

・Su－57

・Su－47

・Su－37

・Mig－35

・Su－34

・F－1

爆撃機
・Ｂ―５２Ｈ
・Ｂ―１Ｂ
・Ｂ―２
練習機
・Ｔ―４
・Ｔ―２

輸送機から一人の老人が降りてきた。
「いかがですかな、土屋提督。」
「あ、これはこれは国連のアダムス事務総長。お世話になっております。」
土屋にアダムスと呼ばれたこの老人こそが深海棲艦に唯一対抗できる組織である鎮守府を支援するために国連を動かし、世界中から航空機の譲渡という形で軍用機を掻き集めた男である。
「それにしても、よくこれだけの国から集めましたねぇ。ロシアなんか絶対協力しないと思ってましたよ。」
「彼らもある程度被害を受けているらしいからな。ワラにもすがると言ったところなんじゃろう。」
「しかも開発段階で挫折したり生産終了した機体をメーカーに生産させるというのがまた凄いですね。」
「まぁ、国連が補助金を出すという条件付きじゃがな。」

ただ一つ気になることがあった。明石が来たので聞いてみる。
「おい明石、３週間くらい前に俺の部屋忍び込んだろ。」
「きゅ、急に何ですかそんなことしてませんよ。」
「俺の部屋に置いてあったエアーウルフのＤＶＤが無くなってたんだ。そして今このリストには「ＡＩＲＷＯＬＦ」というのがあるんだが・・・」
「あ、あの用事思い出したんｄ」

「待てやゴルァ」（威圧）
「勝手に忍び込むなんてするわけないだろホーク！」
「お前今俺のことホークって呼んだろ」
「俺はそんなこと言ってないぞドミニク？」
「配役を替えればいいと思えば大間違いだぞ・・・・んじゃテストしてやる。回答によっては許可してもいい。」
「ホントですか!?」
「んじゃいくぞ。『ホーク、サイドワインダーだ！』
「太陽弾を出せ！」
「お前やっぱ忍び込んだな！まぁいい。絶対俺は乗らねぇからな！」
「じゃ他に誰が乗れるんですか」
「お前や。」
「いやーーだーーー!!!」
　ま、作ったヤツの責任だな。
「安心しろ、骨は拾ってやる。」
「ムリーーーー！」

「それはそうとして、このＦ―４ＳＸとＦ―１５ＸＸってのは何だ」
「うちで作った新型です。いいとこどりみたいなのを目指して設計しました。」
「ほう」
「まずＦ―４ＳＸは幻のＦ―４Ｘをベースにフェニックスとアムラームの運用能力を与え、エンジンをターボファンに換装、レーダーをＦ―３５のものにしてＥＯＴＳとＥＯ　ＤＡＳを追加して、ＡＡＭ―５を統合してＨＭＤ対応に。あと左右連動のスタビレーターを左右独立して動作させてロール制御もできるようにしました。フライバイライトと電動アクチュエーションも試験的にですが装備しました。Ｆ―１５ＸＸはＳ／ＭＴＤをベースにサイレントイーグルのステルス設計を取り入れてＲＣＳの増加を最小限に抑えて、新素材を大量導入して軽量化。もちろんカナードと偏向ノズルはそのままです。コ

ンフォーマルウエポンベイには対空ミサイルを４発まで装備できます。機関砲と空中給油用の給油口の行き場がなくなっているので給油口はエアブレーキの後ろに移動して機関砲は左の脚収納庫前側に移設、バランスを取るために右側の同じ場所に小型のＰＬＳＬを追加しました。あとフライバイライトと電動アクチュエーション、ラダーの面積拡大とエアブレーキ機能の追加、主翼下ハードポイントの増設を行いました。これだけいろいろ付けてますが軽量化も気を配っているので意外と重くないんですよ」
「なるほど。そっちはやってることはムチャクチャだが目的は割とまっとうだな」
「どちらも対空重視です。」

「そんで、ＸＸを元に作ってしまったと・・・・」
　目の前には向上した運動性を搭載量の増加に全振りしたようなイーグルが置いてある。２連ランチャーを使い対空ミサイルを倍の１６発にしただけでは飽き足らずコンフォーマルウエポンベイに４発、胴体下にも２連が２つで４発。さらに主翼下の外側にハードポイントを新設してそこも２連装備で左右合計４発。内側のパイロンの一番下にはフェニックスを１発ずつ。合計で３０発・・・
「明石、これは対空ミサイルを運ぶ輸送機か？」
「失礼な。ちゃんと戦闘機ですよ！」
「お前なぁ・・・対空兵装だけで５トン以上っておかしいだろうがよ格闘戦とかいうこと以前に離陸が一苦労じゃなぇか」
「でもＦ―１５Ｅはもっと重いですよ。」
「それは元々そういう設計だからいいんだよ。」

　だめだ、話が通じない。
「んじゃ私からも言わせてもらいますけど、初等練習機をなぜ配備しないんですか？」
「それは今ある艦爆とかを流用するからだ」
「単座機はどうするんですか？」

「それは考えてある。」
放送でグリムとチョッパー、夕張を召喚する。
「何でしょう隊長」
「俺様の出番ってワケかい」
「ああ、ある機体をフェリーしてほしくてな・・・こいつなんだが」
九六艦戦と零戦を指差す。
「こいつぁ、なんだ・・・ロックンロールに似合わねぇ機体だな」
「うわぁ、初めて見ました・・・物持ちいいですね」
「好きな方選んですぐ上がって。俺はプラウラーで追いかけるから。」
「それで提督、どこ行くんですか？」
「岐阜基地だ。飛実団に相談事があってな。夕張と明石は俺が乗せてく」
「それじゃあ僕が９６で先に行ってますね。」
「俺様もすぐ出発するぜ」
「おう、後でな」
２機が離陸して少ししたころ３人とも着替えてエンジンスタートした。４０分程で到着した。

「かくかくしかじかで無人の標的機を既存機の改造で作りたいんですが・・・」
飛実団の人と話をする。
「それでベースは？」
「持ってきてます。もうすぐ来ると思いますけど・・・・ああ、来ました。アレです」
「あ?!?!?」
「あれって、零戦と９６艦戦ですよね!?」
「そうです。」
「ケーブルで操舵する時代の・・・」
「そう」
「いやいやいやいや」
「冗談ですよね。」

「残念ながら大マジです。なるべく低予算で・・・」
「なら操縦系に直接介入せずに操縦桿を油圧で制御してはどうでしょうか」
「シンプルだなぁ」
「でも1番安く上がりますよ。というかコレクターとか博物館に引き取ってもらえば・・・」
「やったよ。世界中のマニアと博物館に動態保存ができるよう部品取り機まで付けて譲ったのにまだ１００機近くあるんだ。複座は練習機として使うが単座機はターゲットドローンにしようと思ってな。」
「えぇ・・・(困惑)」
「とりあえずその方法で作ってみることにしよう。あと、済まないが少し出かけたいから機体をここに置いていいかな?夕方には戻るから。」
「あ、はい。」
「助かるよ」
　近くでレンタカーを借りて5人で国道２１号をひた走り、坂祝町から恵那へ抜ける。
「隊長、今どこへ向かってるんですか?」
「グリム、お前行き先も知らんとクルマに乗ったんか?」
「隊長が教えてくれなかったんじゃないですか!」
「わーったわーった。行き先は恵那峡。」
「どこですかそれ」
「まあ今は紅葉の名所とだけ言っておこう」

　土岐から中央道で恵那まで走る。ＥＴＣカード持ってきて正解だった。インターを降りてしばらく走ると、ボート乗り場のような所で止まった。
「さて、ここから全員足元を見て歩け。俺がいいと言うまで顔を上げるな・・・・・・」

テクテク・・・

「はい、いいぞ」
「「「おーーーー!!!」」」
「ブービーにしちゃ味のある場所だな」
「キレー!」
　目の前には木曽川の渓谷、そして見事な紅葉が広がっていた。
「なかなか凄いだろ」
「でも提督、なんでこんな場所知ってるんですか?」
「叔父の家が近くにあってな、小さい頃来たことがあるんだ。」
　しばらく景色を楽しんだ後、またクルマで移動する。今度は１０分もかからない場所だ。

「よーし、お土産買うついでに甘いモンでも食うか!」
「「「やったー!」」」（甘党集団）
　その店はなかなかに大きく、栗をテーマにしたお菓子を中心に扱う店だった。看板商品の栗きんとんをお土産に買っていく。
「夕張、１人一個として・・・・鎮守府に何人いるんだ?」
「多分１５０あれば足りると思うけど・・・」
　１５個入りを１２箱買った。さらに奥の喫茶スペースで栗ソフトを買って皆で食べた。
「これ美味しいですね!」
「兄貴にも食べさせたいなあ」
「なかなかイケるな」

　そしてレンタカーを返して岐阜基地に戻ってきた。
「すいませんねワガママ言って機体置かせてもらって・・・」
　栗きんとんをお礼に渡す。
「いえいえ。それどころかもう見られないからって整備員やパイロットが集まってくる始末で・・・」
　見ると自分たちの機体に人だかりができている。

「あ、すいません。すぐどきます！」
「ああ、別にゆっくり見てもらって構わないんで」

1時間ほどして出発した。
鎮守府に戻ってお土産を配る。秋月が「本当に良いんでしょうか・・・」って顔してた。

～数日後～
操縦桿に油圧装置を付けて操縦桿自体を直接操作するタイプのUAV化ユニットが完成し、実際に試験したところなかなか良さそうなので採用とした。これでジェット機の運用スペースが作れる・・・

ＡＣＴ・８　呉鎮守府航空祭

―朝礼にて―

土屋「えー、諸君、楽にしたまえ。と言いたいところだがそうも行かん。伝えなければいけないことがある。我々の活動、そして装備と練度を見てもらうべく１１月２５日に当鎮守府において航空祭を開催することにした。ついてはその・・・何だ、君達に会場での屋台・ブースの運営が求められる。基本的にはどんなブースでも構わない。ただし、一つだけ条件がある。頼む、頼むから本番前に俺の許可を得てくれ。それだけだ。１か月少々あるので今週中に出店の申し込みをするように。以上、解散」

「しつもーん」

「何だ瑞鶴。」

「何で『航空祭』なの？鎮守府でしょココ」

「あー、それな。いや敷地に観客入れても海上を滑るお前らは見えにくいっていうのと、あとこっちの方が気軽に行けそうなネーミングなのと何より見てみろ、あの立派過ぎる基地設備と滑走路」

外を指差す。見えるのは３キロ級の滑走路２本と格納庫が８つ、そして掩体が５つ。

「知らんヤツが見たら海軍じゃなくて空軍の施設だぞ。」

「あー、そういうこと・・・」

「そういうワケだ。では質問無いなら解散。」

瑞鳳が司令室に入ってきた。

「てーとく、さっきのお店なんだけど・・・」

「卵焼きか？」

「そうそう！」

「別に問題無いぞ。すぐ準備始めちゃってくれ。」

「ありがとう！提督！」

「提督さん、さっきの話なんやけど・・・」

「待て浦風。当ててみよう。牡蠣だな！」
「残念、ハズレじゃ。広島焼きじゃ！」
「全然オッケー。任せた。」
「了解じゃ！」

「司令官、入るわよ！」
「おう、六駆か。どうした？」
「さっきのお店の話なんだが・・・」
「カレー屋さんをやりたいのです！」
「ああ、良いよ。お任せしよう。」
「「「ありがとう（なのです！）」」」

とまぁ、そんなこんなでその他にもダンスステージやら漫才やら結構な数のブースが集まった。食べ物屋台が多いがイベントステージなんかもやることになった。自分もメビウス隊の８人で展示飛行を担当している。

～一週間後～
えー、スケジュールでけますた。
こんなん←
０７３０　天候偵察（Ｔ―４）
０８００　開場
０８３０　オープニングフライト（Ｆ―１５Ｃ、Ｆ―４Ｇ、Ｆ―１０４Ｇ）
０９００　開会式
０９３０　戦術偵察・機動飛行展示（Ｆ―２２Ａ、Ｆ―４Ｅ、Ｍｉｇ―２５ＲＢＴ）
１０００　ヘリテージフライト（零式艦戦、９６艦戦、二式水戦）
１０４０　救難展示（ＵＳ―２、ＵＨ―６０ＪＡ、Ｕ―１２５）
１２００　イベントステージで川内型＆陽炎型ダンスステージ→

１３００からチョッパーはじめラーズグリーズ隊メンバーと有志による演奏（ロック、ユーロビートなど）
１３００　メビウス隊８人による曲技飛行展示チーム、「リボン・オブ・アローズ」展示飛行
１４００　空挺降下展示（Ｃ―２）
１４２０　模擬空対地射爆撃、模擬空対空戦闘（Ｓｕ―３４、Ｆ―２Ａ、Ｆ―２スーパー改）
１５００　異機種編隊飛行・模擬空中給油（ＳＲ―７１、トーネードＩＤＳ、Ｆ―８６Ｆ、Ｆ―１１７、Ａ―４、Ｂ―５２Ｈ、ＫＣ―１０）
１５３０　外来機展示飛行［Ｆ―４ＥＪ改、Ｆ―１５Ｊ（近代化改修Ⅱ型）］
１６３０　外来機帰投
外来機
空自から
Ｆ―４ＥＪ改、Ｆ―１５Ｊ（近代化改修Ⅱ型）

その他
Ｓｕ―２７
Ｍｉｇ―２９
Ｆ―５Ｅ
以上。

我ながらよくもまあ詰め込んだモンだ。それから当日まで鎮守府全員が協力して準備を進め、ついにその日を迎えた。さらに食堂では屋台に負けじと徳島出身の自分に祖谷そばと徳島ラーメンの監修を頼んできた。作り方を調べるべく故郷の徳島に帰還を果たしたがそれはまた次回・・・

～当日～
早朝から準備に取り掛かる。妖精さん達が格納庫から機体を引き

出し、艦娘たちが屋台のテントを作り、パイロットは機体の整備や滑走路の異物を撤去してＦＯＤ（異物吸入によるエンジン損傷）対策を行い、またあるパイロットはイメージトレーニングやブリーフィングに余念がない。そして当の自分はというと・・・

開会式の原稿を書いていた。

なぜこんなことになったのかというと、３週間も前からほっぽりだしで遊んじゃってたからである。

だがしかし、ここからの怒涛の巻き返しこそが自分の本領なのである。
大淀「提督って夏休みの宿題いつやるタイプでした？」
土屋「２学期の中間テストあたりだな。あとはなるべく踏み倒してた」（笑）
大淀「うわぁ・・・」

２時間後・・・・
「でけたーー!!」
「はい、ＯＫです。あとは本番までにコレを覚えて下さい。」
「・・・・えっ？」
「暗記」
「ンアーーーーー!!!!!」

さて、ＰＪとグリムが天候偵察から帰ってきた。天気は快晴、少し肌寒いが絶好の航空祭日和だ。憲兵たちによるセキュリティチェックのテントも建てた。開門と同時に客がなだれ込んでくる。それもそうだ。ファンにとっては日本では絶対に見れない機体や本でしか知らないような機体が列線を組み、さらにそれが目の前で飛ぶのである。

そしてオープニングフライトからもうイーグルやファントムやマルヨンがもう大暴れ（笑）
正直開会式とか誰も見てなくて涙目・・・
続く機動飛行ではポストストールマニューバを見せるラプターに引けを取らないレベルのＭｉｇ―２５の機動がハイライトｗ
そして戦術偵察展示のためにＭｉｇ―２５ＲＢＴが爆音を轟かせ飛び回る。

そしてヘリテージフライトと言う名のレシプロ模擬空戦！めっ

ちゃ盛り上がってるし・・・
救難展示は地味だがレベルの高さは伝わっていたようだった。そして午前中の展示をしながら屋台を回ってみることにした。
「さてと、まずは吹雪型の屋台か・・・ん!?」
吹雪たちは確か焼き芋の屋台だったハズだが・・・何だこの大盛況ぶりは・・・
すると深雪がこちらに気付いた。
「お、お疲れ様！司令官！」
「すげえ売れ行きだな」
「いやー、何か知らねえけどやたら売れるんだよなぁ。何か心当たりあるか？」
「いやぁ、無いなあ。とりあえず邪魔しちゃアレだし引き上げるわ。」
「おう！」

次は・・・っと。えーと、『第六駆逐隊カレー&ピロシキブース』か・・・
ん？ピロシキに売り切れの札が！
「何？司令官。」
「ああ響か。なかなか繁盛してるみたいだな。」
「すまない、ピロシキは売り切れてしまったんだ。」
「別にいいよ。素晴らしいことだ。」
「あ、司令官さん！カレー食べるのです？」
「いや、様子見に来たんだ。それに昼から展示飛行だからあんまり食べない方がいい。」
「そうなのですか・・・」
「まあ今度食べさせてくれ。」
「はいなのです！」
可愛い・・・

その他鎮守府農園野菜の販売(!?)やたくあんなど漬物類の販売、粉

モン屋台などを一通り回ってきた。どれも非常にハイレベルで、フライト前なのが悔やまれるほどだった。ただし磯風が焼き魚の販売と言う名のバイオテロをやっていたのでそれだけ止めてきた。

♩カーモンベイビーアメリカー

ん？あれは川内型＆陽炎型ダンスステージか・・・キレッキレだな！

お、曲変わった。ラーイラーイライジングサーン♩

しばらくしてチョッパー達が交代で登場。１曲目は・・・Ｂｌｕｒｒｙか。やっぱりな。ボーカルがチョッパーだとなかなか合うな。しばらくすると夕張登場。チョッパーとデュエットでユーロビートを歌い始めた。「頭文字Ｄ」の曲だ。

お次は龍驤と黒潮の漫才。あの２人のネタと演技は正直プロレベルだ。抜群のコンビネーション。

さて、我々も展示飛行の準備だ。４機のタイフーンの編隊機動と４機のラプターによるソロ×２と２機ペアのオポシング・ソロという少し変わった構成だ。ブリーフィングを終えてウォークダウンを行い、機体に乗り込む。久しぶりのＦ―２２Ａだ。

８機が編隊を組んで離陸し、ブルーインパルスと同じようにタイフーンはダイヤモンド・ダーティーターンを行い、ラプターはソロ２機がロールオンテイクオフ、ローアングルキューバンをする。自分はローアングルキューバンだ。そしてオポシングソロの２機はＴＡＣデパーチャーを行う。これらを同時にやってのける。

自分はソロ１番機として、失速（ポストストールマニューバ）機動を中心に、メビウス２が高Ｇ旋回やハイレートクライムを行った。詳しく描写すると長くなるので省くが、メビウス隊の実戦仕込みの高い技量、そしてＦ―２２Ａとタイフーンの超高機動性を見せることができた。スモークの代わりにフレアを撒くとエプロンからどよめきと歓声が起こった。

そしてＣ―２からの妖精さんによるパラシュート降下の展示。あの可愛らしい妖精さんがサングラス＆迷彩服を着てると笑えてしまう・・・

次に鎮守府の最新鋭マルチロールファイター、Ｓｕ―３４とＦ―２とＦ―２スーパー改の射爆・空戦展示。大型のフルバックとブルーの機体が印象的なＦ―２の迫力はパイロットの自分でも見入るほどだ。

さらに異機種編隊飛行と空中給油の展示が行われたが、ＳＲ―７１とＢ―５２とＦ―１１７とセイバーが編隊を組むのはなかなかにシュールだった。

最後に空自のＦ―１５ＪとＦ―４ＥＪ改が外来機として展示飛行を行う。ウチの展示に引けを取らない機動を見せる。ファントムも大暴れだ。

そして日も暮れ始めた頃、外来機が帰投し、航空祭の終わりを告げるＢＧＭ「Ｂｌｕｅ　Ｓｋｉｅｓ」が流れる。この曲を聴くと大陸戦争のころを思い出して切なくなる・・・

来場者がほぼ帰った所で片付け始める。

自分も諸々の片付けを手伝っている。救護所のテントを折り畳んでると、声をかけられた。

??「あ、お疲れ様です司令官！」

土屋「おう吹雪か、お疲れ。屋台凄い客だったな」

吹雪「でも司令官も凄い飛びっぷりでしたよ！ちょうど休憩時間だったんで見てたんですけど、ビックリしちゃいました！あ、あと最後の焼き芋を司令官のために取っておきました！あとでお持ちして

もいいですか？」

土屋「本当か、ありがとな。あとで貰うよ。」（ええ子や・・・）

そして航空祭が無事に成功し安堵するのもつかの間、ついに日本から始まる人類の反攻作戦が発動される・・・

ＡＣＴ・９　帰省

～航空祭の２週間ほど前～

間宮とイベント限定メニューを考えている。なかなか良いのが思いつかなかった。

「うーん・・・」

「なかなか良いのが思いつきませんね・・・」

「そういえば提督の地元の名物とかありません？」

「ああ・・・祖谷そばとかあるな・・・」

「おそばですか、良いですね！それにしましょう！」

「だが作り方は知らんぞ・・・いや、爺ちゃんなら知ってるな」

爺ちゃんとは両親を亡くした土屋の育ての親である。ベルカ戦争が始まる前に別れ、それ以来会ってない。いい機会だ。

「よし、俺が聞いて来よう。明日ＪＲで行ってくる。」

「すいません、お願いします」

「提督、お客様がお見えに・・・」

大淀が入ってきた。

「客？誰だ・・・とりあえず通してくれ。」

「はい・・・・こちらにどうぞ」

軍装の男が１人入ってきた。階級章を見ると・・・・

航空幕僚長
!?!?!?!?!?

幕僚長ということは空自のトップである。なぜそのようなお方が直々に・・・？

「初めまして、土屋と申します。本日はどういったご用件で？」

「いやぁ、今度そちらの航空祭でウチからも外来機を出そうと思いまして。その許可を頂きに参りました。」

「ありがとうございます！ぜひぜひ！イベントが盛り上がりますよ。でもそれだけなら電話で済む。ということは他の用事があった、そうじゃないですか？」

「やはり気付いてましたか。実はですね、アメリカがＦ―２２の対日

輸出を許可したんです。」
「ほう」
「それで残るＦ―４ＥＪ改とＦ―１５ＪのＰｒｅ―ＭＳＩＰ機（非近代化改修機）の９０機をそちらに譲渡することが可能か検討しに来たわけです。こちらとしてもスクラップ費用が浮くんですが・・・」
「なるほど。既に解体した分も部品取りにしたいんでもらえますかね？」
大淀が口を挟む。
「中古機ですか・・・費用対効果の面でどうなんでしょう」
幕僚長は書類を取り出した。いろいろな金額が書かれている。
「こちらをご覧ください。もし引き取って頂けるのでしたらその場合は延命工事は必要ですがそれでも・・・」
「２機の予算で３機はいける、ということですね。」
「大体そんな感じですね。」
「分かりました。ありがたく頂きましょう。ただし１つだけ条件を。ＤＪも５機でいいので欲しいのですが・・・」
「ああ、機種転換訓練に必要ですね。いいでしょう！」
「ありがとうございます！」

見送った後、工廠に建造に来た。
「すんませーん」
「はいはい、あ、てーとく！」
「妖精さん、空母レシピでデイリーの４回分回してもらえる？」
「りょーかい！」

明日は帰省するのでバーナーは使わずにノンビリ建造してもらおう。

最近愛用している拳銃のマテバをメンテしてないことを思い出したので分解して掃除する。
すると妖精さんが整備の報告に来た。

「これこれこーで、かくかくしかじかだったよ！」
「了解。いつもありがとな。」
「そういえばてーとく、あたらしいマークとなまえがほしいっていってたけど・・・」
　そうだすっかり忘れてた。メビウスとガルムとラーズグリーズが集まっているのに俺は一人だから部隊は他のメンバーに預けて俺は独立しようと思ってたんだ。マークとコールサイン決めなきゃ・・・
「どーするの？」
「何か良い案ない？」
「うーん・・・あ！いまけんじゅうのてんけんしてるから『トリガー』なんてどう？」
「安直やな・・・でもかっこいいしそれにしよう！」
「マークは・・・」
　メモ帳に簡単に描いていく。犬がレボルバーを銜えたマークだ。
そして・・・

　そのマークに筆で白の線を３本斜めに入れた！

おいおいマジかよ！

「このらいんはてーとくがいままでせんそうを3かいひっくりかえしたから3ぼん！」
「そういうことね。」
ということでパーソナルマークとコールサインが決まった。

夕方には荷物をまとめ、ＪＲの切符を手配する。
大淀に明日休むことを伝えると・・・
「そんな、お一人でなんて危険すぎます！やめてください！」
「いやあのただの帰省なんやけど」
「それでも何があるか分かりません！」
「俺を何やと思っとるんや・・・」
「はぁ・・・じゃあ護衛を連れてください！」
「え」
「明日非番の子は・・・」
「マジかよ・・・」
追加で切符買わなきゃじゃん・・・
みどりの窓口行ってる間に誰がついてくるのか決まったらしい。
「というわけでこの2人を同行していただきます。」
「翔鶴です。」
「照月よ！」
「空母って護衛される方じゃないの？」
「ガンガン撃って！」
「ダメ！」

～翌朝～
「じゃあ出発！」
「はい、これならいけそうです！」
「防空駆逐艦照月、抜錨します！」
「出撃じゃないし電車で行くぞ。」

「宇多津で降りようか」
「え？」
「どうしたんですか提督？」
「昼飯にしよう」
　駅から15分ほどの所に美味いうどん屋があるのを思い出した。歩いて店に向かう。
「ココや、冷や天おろしが美味い。これや」
「おいしいです！」（昼食シーンは超早回しでお送りしております）
　ここは相変わらず繁盛してるな。まぁ回転も早いが。
　さくっと昼を食べたら一区間だけ鈍行に乗り、丸亀から特急南風に乗る。このディーゼルの爆音は大好きだ。
「トンネル長いね提督！」
「ココは猪鼻トンネルって言ってな、確かうろ覚えだけど4キロぐらいあったかな」
「へぇ～」
「でも何か変な揺れ方しません？」
「振り子車だからな。振り子っていうのはカーブ曲がる時に台車はそのままに車体だけを内側に傾けて乗客が感じる遠心力を軽減するシステムだな。」
「そうなんだ～」
「もうすぐ着くぞ」

　阿波池田の駅に着いた。駅舎が少しきれいになっている。商店街はすっかり寂れて、スーパーやおもちゃ屋、本屋まであったビルは全

て撤退して市の施設しか入ってない。アーケードを抜け、住宅街を10分ほど歩く。この辺りはあまり変わっておらず、懐かしかった。店に入る。実家は住居スペースが店舗スペースの奥にある。

ガラガラ「すんませーん」

「はいはーい」

婆ちゃんが出てきた。

「何本入りになさいますか～？」

今は羊羹しか扱ってないらしい。本数を聞かれた。

「いやあの、俺だよ俺」

「詐欺かい、帰りな」

「いや拓海なんやけど」

「え？」

「うん」

「あらあらまー立派になって！こんな美人なお嫁さんまでもらって可愛らしい娘さんまでおって！」

「およm・・・」／／／

「むすm・・・」／／／

「そういや大じいちゃんは？」

「・・・大往生だったよ」

「そうか・・・・あとでお墓行かないとな・・・」

「どうしたんじゃ」

「あ、じいちゃん！」

「その声は拓海か?!大きなったのぉ！ん、そちらの2人は・・・」

「あーえと、嫁の翔子と娘の照美や」（適当に名前作った）

「「はじめまして」」

「全く年賀状も寄越さんから心配しとったぞ」

「ごめん・・・それで実はじいちゃんに祖谷そばの作り方を教わりたいんやけど・・・」

「構わんけど材料が無いきん買うてこないかん」

「構ん。明日でええから。」

「ほーか」

その後お墓参りをして、まだ時間があったので友達の家に向かった。家業のクルマ屋を継いだなら同じ場所に住んでるハズだ。
「らっしゃいませ～！」
「おう、平野か？」
「は、はい・・・」
「中学まで一緒だった土屋だけど・・・」
「あ、お前か！懐かしいのぉ！」
「あ～、翔鶴たちは知らないな。コイツは昔の同級生の平野だ。どうや店は？」
「仕事少ないきん、ラリーでも出ようかと思っとるんや。やけどコ・ドライバーがおらんき」
「俺やろっか？ライセンスあるし・・・」
「ええんか？じゃ頼むわ！」
「じゃ今度また連絡してくれ。そういえば工場に入ってるＧＣ８はお前のか？」
「下取りで入ったんやけど、なかなかええクルマじゃきん売らずに持っとるんよ」
「そーなんか？」
「なんとビックリ２２Ｂ―ＳＴＩバージョンや」
「何と！あの４００台限定の・・・」
「ちょっと裏来てみ」
　裏手の駐車場に入ると・・・
「おお！」
　ＳＴ２０５セリカＧＴ―ＦｏｕｒとＲＸ―７（ＦＤ）バサーストＲ、そして・・・
「コイツは・・・ＧＭの８２年式ポンティアック・ファイヤーバード・トランザムか！」
「そうなんよ。さっきのインプとこの３台はなかなか良い値で売れそうなんやけど・・・」
「言い値で買う」

「「へ？」」
　３人が同時に固まる。
「どのクルマを？」
「さっきのインプとこの３台、その代わり積車だけ貸して」
「えぇ・・・じゃ中古だし友達のためなら頑張って・・・全部込みで４台１０００万でどうだ？」
「バーゲンプライスだ！」（小切手書く）
「よっしゃ完璧に整備して積車に載せて明日には納車する！久々の大仕事じゃ」
「頼んだ」

　まさか帰省してクルマ買うとは思わなかった・・・

　翌日、蕎麦の作り方を教わってから買ったクルマを積んだキャリアカーで鎮守府へ帰った。瀬戸大橋の横風が怖かった。

「２人ともお疲れ様。荷物は自分で持ってくから部屋戻ってて。」
　分かれて廊下を歩いているとラーズグリーズのメンバーが部屋の前で待ち構えている。
「みんな揃ってどうした？」
「実は・・・ナガセさんがココを離れることになったんです。」
「え？」
「ナガセの奴、ハーリング大統領から宇宙飛行士にならないかってお誘いを受けたらしいぜ」
「へ～・・・てマジか！」
「ただ・・・・受けるべきか迷ってるの」
「何で？」
「今まで２番機として飛んできたのに急に船長、しかも宇宙まで行くなんて・・・」

「ナガセ、俺は行ってくるべきだと思う。せっかく大統領が用意してくれた道なんだ。それに昔、『もっと先へ行く』って言ってただろ。お前は俺なんか比べ物にならないくらい強いんだ。だから何があっても大丈夫だから自信持て。行って来いナガセ。向こうで何が見えたか聞かせてくれ。」
「ブレイズ・・・分かった。行ってくる。」
ソーズマンが何か言いたそうな顔をしている。
「どうした?」
「実は知人がサルベージの会社を立ち上げたんです。潜水艇で海の落とし物を地上に返す仕事です。そこで社員にならないかと誘われまして。」
「そうか・・・みんな新たな世界を見に行くのか・・・元気でやれよ。」
「はい・・・!」

さて、風呂も入ったので今日は寝よう・・・
と思ったのだが・・・・
「なぜここにいる?」

翔鶴と照月が寝室にいた。

「いやここ俺の部屋だし自室に帰れって言ったよな？」
「家族なら一緒に住みますよね？」
そうだそういえばそんなこと言ったな俺・・・
でもここで否定するのも可哀想だし・・・受け入れるか。
「でも寝床は・・・」
「一緒に寝ます！」
ええ・・・

というワケで翔鶴と照月が同棲することに・・・

翌日
寝れるわけが無い。だって狭いもん！（島風風に）
今日は建造の４人が来るはずだ。
１人目が来た。Ｒ０７　Ａｒｋ　Ｒｏｙａｌというらしい・・・
ん？装備が・・・
・ファランクスＣＩＷＳ　３基
・ＧＡＭ―ＢＯ１　２０ｍｍ機銃　２門
・ハリアーＧＲ７／ＧＲ９
・シーキング
・マーリン　ＨＭ　Ｍｋ１

おかしい、本人は書類にあった通りなのに装備だけが現代に・・・
「私は、Ｈｅｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ，ｓ　Ｓｈｉｐ　Ａｒｋ　Ｒｏｙａｌ。　Ａｄｍｉｒａｌ…貴方が……。　……よろしく。」
「こちらこそよろしく。期待してるぞ。」

２人目　手元の書類には　Ｌｅｘｉｎｇｔｏｎ級　２番艦　Ｓａｒａｔｏｇａ　とある。
だが装備は・・・
Ｍｋ２９　シースパロー８連装発射機　３基
Ｍｋ１５　ファランクスＣＩＷＳ　３基
Ｆ―１４Ａ
Ｓ―３
Ａ―７Ｅ
・・・・・・もう何も言わない。
「Ｈｅｌｌｏ！　航空母艦、Ｓａｒａｔｏｇａです。
提督、サラとお呼びくださいね。よろしくお願い致します。」
「よく来てくれた。俺もトムキャットなら乗ったことあるぞ。」

３人目　大鳳
よかったようやくまともになった・・・
「そう…私が大鳳。
出迎え、ありがとうございます。
提督…貴方と機動部隊に勝利を！」
「安心したよ・・・」
「何がですか？」
「いや何でも・・・」

４人目　秋津洲
水母か・・・
「水上機母艦、秋津洲よ！　この大艇ちゃんと一緒に覚えてよね！」
「ウチの最初の水上機母艦だ。よろしく。」

「あ、ちなみに大艇ちゃんはあげないよ！」
「いやいらんし・・・」
「え？」
「俺飛行艇持ってるから。ほらアレ」
エプロンに置いてあるＵＳ―２を指差す。
「でもでも、大艇ちゃんには敵わないかも！速度だって・・・」
「ごめんね５８０ｋｍ／ｈ出るの。」
「え・・・でも出力は・・・」
「４，５９１ｓｈｐ」
「どうせ１機分のパワーかも！」
「ごめんエンジン１基当たり」
「搭載数も少ない上にこんなんじゃお仕事無くなっちゃうかも・・・」
「大丈夫何とかする。っていうか多分忙しくなる。」
「！　分かったかも！」

さて、いよいよ大規模作戦「沖縄本島奪還作戦」を実行する日が来た。
これからブリーフィングだ。

Ｍｉｓｓｉｏｎ　１０　ＯＰＥＲＡＴＩＯＮ　ＢＵＮＫＥＲ　ＳＨＯＴ　～バンカーショット作戦～

全員がブリーフィングルームに集まっている。今回は遂に占領地域の奪還のための上陸作戦という反撃の第一歩だ。

「国連軍の再編成が終了し、すべての準備は整った。いよいよ深海棲艦に占領された沖縄本島への上陸を敢行する。作戦名は「バンカーショット作戦」だ。　上陸地点は内陸へ向かう道が狭いため守備側に有利な地形で、敵の厳しい抵抗が予想される。　しかし何より放棄された基地の近くであることが、上陸地点を決定する重要な要素となった。

各航空機・艦娘はビーチの敵を掃討し、上陸部隊の被害を最小限にとどめろ。なお今作戦には俺も参戦する。パーソナルマークはコレ。ＴＡＣネームはトリガーだ。」

今回は上陸後は国連軍が展開して本格的に地上戦をする。そのための航空攻撃、艦砲射撃、揚陸支援が目的だ。

まず最初にＥＡ―１８Ｇ、Ｆ―１１７の部隊でレーダー網を破壊、その後爆装のＦ―１４とＦ／Ａ―１８Ｅがトーチカや沿岸砲、対空陣地を破壊。制空権確保をしつつ敵艦を叩いて艦隊の進撃を支援し、その後は上陸部隊を送りつつ沿岸の残党を艦砲射撃と航空攻撃で支援する。

自分はトムキャットで出る。ペイブウェイを３発とＬＡＮＴＩＲＮ、自衛用のＡＩＭ―９Ｌを２発装備する。エプロンを歩いているとＦ―１０４が列線を組んでいる。

・・・ん？

何か１機多い気がする・・・数えてみてもやはり多い。その時気付いた。１番奥の機体はＮＦ―１０４Ａだ。誰がこんなのを・・・近く

にいた夕張に聞いてみた。
「おい、アレについて何か知らないか？」
　しばらくの沈黙の後、答えが返ってきた。
「知ってる？そこの裏山に、自衛隊や在日米軍で使われた飛行機が眠ってるってこと。大事にモスボールされた機体もあれば、すっかりジャンクにくたばり果てたのもある。管理人さんとは飲み仲間で、ジャンクの方から少しずつ引き出しても何も言わなかったの。そうして飛べる機体を組み立てようとしたの。私と、明石さんと、妖精さん達の手で。６カ月と８日かかって、エンジンに火が入った。それから１カ月半と少々、機体のバランスを完璧に近い所まで持って行っｔ・・・」
「この大馬鹿野郎！」ポコ！
「あいた！」
「せめて使える機体にしろよ！宇宙飛行士育ててどうすんだ！」
「ダークブルーの空を見てみたかったんですよぉ！」
「そこにＳＲ―７１があるだろーが！」
「え」
「お前知らんかったんか・・・とにかくコイツはボッシュートです！」
「あああぁぁぁ！」

　全く・・・
　気を取り直してハンガーへ向かう。三本線の描かれたトムキャット。既に準備は出来ている。投下したらすぐに帰って機体を替える。既に夜明けと同時に攻撃する第一波は飛び立った。タキシーウェイに入る。
〈呉グランド、ストライダー１、フォーフォックストロットワンフォー、リクエストタクシー〉
《ストライダー１、呉グランド、ランウェイ・２７Ｒ、タクシー・トゥ・ホールディング・ポイント・オブ・Ｎｏ．９》
〈ストライダー１、タクシー・トゥ・ホールディング・ポイント・オブ・Ｎｏ．９〉

グランドからの許可が出たのでタキシングを開始する。
《呉タワー、ストライダー1・ウィズ4、レディ》
▪ストライダー1、ランウェイ・27R、ラインアップ・アンド・ウェイト▪
《ランウェイ・27R、ラインアップ・アンド・ウェイト。ストライダー1》
▪ストライダー1、ウィンド・020・アット・シックス、ランウェイ・27R、クリア・フォー・テイクオフ▪
《ストライダー1、ランウェイ・27R、クリア・フォー・テイクオフ》
「ゴー・ゲート!」（A／B点火）をコールし、機体を加速させる。十分な速度でピッチアップし離陸する。ギアを上げて20000フィートまで上昇していき、「バスター」（A／Bカット）をコールして巡行する。
途中で空中給油機の支援を受けながら向かう。すると無線が入る。
▪ゴリゾント1、ターゲット破壊▪!
《敵レーダー網沈黙!》

今の所予定通りだ

目標上空に到達した。レーダーを破壊されても対空火器が撃ち上げてくる。しかし高高度では直撃弾は無く、キャノピー越しの近くで砲弾が炸裂するだけだ。それでも機体は僅かに揺れるが気にしない。レーダー員が目標にレーザーを照射しペイヴウェイを投下、バンカーやトーチカを破壊する。
特に大きなトーチカを発見し投下するが信管の調整が甘かったのか不発だった。もう一度投下すると爆発が2回立て続けに起きた。どうやら不発弾も炸裂したらしい。全弾投下したので僚機のF／A—18のL—Mav（AGM—65マベリック）をレーザーで誘導支援して敵戦車をいくつか破壊し帰投する。同時に艦娘達が沿岸部隊に砲撃を開始しビーチの敵を吹き飛ばす。既に二航戦と一航戦が直掩にいるので心配は無いだろう。

再び呉に着陸し、エプロンに用意されたＦ―１スーパー改に乗り込む。

この機体は国産初の超音速戦闘機、三菱Ｆ―１をベースにほぼ新規設計レベルの改良を加えた我が鎮守府オリジナル機だ。実験機Ｔ―２ＣＣＶのようにカナード翼を持ち、電子機器の大幅な小型化でパイロットの後方視界を悪化させていた電子機器室を無くし、さらに燃料タンクを増設したため航続距離も延長している。レーダーも小型ながら高い出力を誇るガリウムナイトライドＡＥＳＡレーダーを装備する。兵装も機関砲がそのまま残されているが機首の反対側の同じ場所にＰＬＳＬ（パルスレーザー式機関砲）が装備されている。操縦系もスポイラーを廃しフラッペロン式に変更、各動翼よ作動角も大幅に拡大した。また水平尾翼も左右独立作動式に、さらにフライ・バイ・ライトの導入でより高い機動性を手に入れた。航続距離の更なる延長のため機体構造は外見はそのままにかなり攻めた設計が取られた。主要構造のほぼ全てをカーボンなどの新素材で一体成型し、さらに成型時に素材そのものに電波吸収素材を混ぜる事でＲＣＳと重量を小さくしている。空中給油用のドローグとリセプタクルも増設された。

そしてタキシングして滑走路に入る。

兵装は翼端にＡＡＭ―５改を１発ずつ、外舷パイロンに７０ｍｍロケット弾ポッドＬＡＵ―３を１つずつ、内舷パイロンにＡＳＭ―１空対艦ミサイル、胴体下に５００ポンド通常爆弾を４発、２０ｍｍ機関砲弾が７５０発、ＰＬＳＬが８００発だ。

Ａ／Ｂで離陸し全速で向かう。

かなりの重武装なので途中でＫＣ―１０から空中給油を受けた。

〜種子島沖〜

空母翔鶴は艤装の不調で僚艦の瑞鶴より遅れて鎮守府を進発した。艦載機の方が速いので瑞鶴と同時に航空支援を行うべく艦載機のＡ―６Ｅ、Ａ―７Ｅ、Ｆ／Ａ―１８Ｃを予定地点よりかなり手前で全て発艦させた。

「ど、どうしてこんな場所に……！」

島の影から現れた艦隊から奇襲を受けた翔鶴は必死で回避行動を続けていた。しかし先手を許した為既に数回被弾して中破状態。相手は軽母と重巡と軽巡と雷巡と駆逐が１隻ずつ。対してこちらは艦載機の無い空母……

……控え目に言って、絶望……

そして砲撃を全速で回避していると水中に何本もの航跡が針路上に向かって来るのを確認した。そして同時に敵機が真上から向かっ

て来る……

急降下爆撃だ

敵は砲撃でこちらを誘導し、特火点に爆撃と雷撃を叩き込む腹積もりらしい。それに見事に掛かってしまった訳だ。だが回避すれば砲撃を、直進すると爆撃と雷撃を浴びる事になる…

「こんな所で殺られるなんて……」

詰んだ……そう確信した

（瑞鶴……提督……！）

魚雷のキャビテーションノイズと敵機の音が目の前まで来たのを感じた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ１１　三本線

「はーっ、はーっ……」
目の前の雷跡、上空から急降下する敵機、降り注ぐ砲弾……
空母「翔鶴」、彼女の命はまさに今消えようとしている。
「被害担当艦」と呼ばれ、１度は沈んだものの艦娘として再び海上に現れたがそこでもこのような事になるとは…
（提督……瑞鶴……！）
妹の笑顔と夫（自称）である土屋の顔が脳裏を過ぎる

その瞬間、敵機から爆弾が投下される

▪翔鶴、伏せろ！！！▪

急に無線に聞き慣れた声が入る。その直後、敵機が投下した爆弾と敵機、さらに魚雷が突如として爆散し大きな水柱を立てる。敵機の破片は飛んで来た砲弾に命中し、空中で爆ぜた。
上を向くと一陣の風が通り抜けた。

～数分前～

空中給油を終え、４機のＦ―１スーパー改が全速力で南へ飛んでいる。上陸部隊と艦隊への航空支援を目的としている。あと数分後には戦域に到達する。土屋はリラックスするため今夜の夕飯のメニューを予想していた。最近は同棲中の翔鶴が作ってくれている。

「やっぱりカレーかな……んんっ!?」

ふと洋上を見ると発砲炎のような光と水柱、そしてそれらを浴びながら必死で回避する航跡を発見した。かなり遠いのでそれが何なのか分からないが戦闘を見逃す訳にはいかないので確実に目視出来る距離まで接近したその時、土屋は気がついた。

「あれは……翔鶴!?」

そこからはほぼ無意識だった。急降下する敵機の動きを予測し主翼下のＬＡＵ―３から７０ｍｍロケット３８発を全弾斉射する。それと同時に無線を送る。

▪翔鶴、伏せろ!!▪

魚雷の針路に向け機首の２０ｍｍ機関砲Ｍ６１Ａ１を４００発程撃ち込み、全て破壊した。またロケットも敵機と投下された爆弾の両方に命中した。砲弾は狙い通り敵機の破片で防げたようだ。しかし敵艦と敵機がまだ残っている。それらを撃破するべく針路を変えた。翔鶴は沈みはしないがピンチなのは間違いないようだ。これ以上艦載機を上げられると厄介なので対艦ミサイルを選択し敵軽空母をロックオンする。主翼下から投下された２発のＡＳＭ―１空対艦ミサイルは海面ギリギリで加速する。相手も弾幕を展開するがその瞬間に急上昇（ポップアップ）し

見事に命中、敵空母は爆沈した。さらに巡洋艦３隻に１発ずつ無誘導爆弾を投下する。無誘導だがパイロットの熟練の技によって吸い

込まれるように命中し、その全てを撃沈する事が出来た。駆逐艦が1隻居るので、魚雷発射管を狙ってＰＬＳＬを撃ち込む。誘爆し、粉々に飛び散る姿が見えた。

▪翔鶴、大丈夫か▪!?

数秒間の沈黙の後、答えが返る。

《大丈夫です、その三本線は……提督？》

▪ああ、そうだ！今すぐ後退しろ▪！

《わ、分かりました……》

編隊に指示を出す。

▪これより、本機は隊の指揮を2番機に移譲し翔鶴の護衛を実施する！ストライダー2、頼むぞ▪！

《はいよ！》

▪空中給油（タンカー）機を回せ、着艦出来ない機体を鎮守府まで飛ばす▪！

《バイキング、了解》

▪翔鶴、護衛に就く！そのまま真っ直ぐ帰投しろ▪！

《は、はい！》

敵機がまだ残っている。艦戦が4、艦爆と艦攻が2ずつだ。こちらの武装はＰＬＳＬが６５０発、２０ｍｍ機関砲が３５０発、ＡＡＭ―５（改）空対空ミサイルが２発……

「余裕だな……」

艦爆を優先的に排除する事にする。高高度から急降下に入る瞬間にＰＬＳＬで２機撃墜する。その間隙を突いたつもりなのか艦攻が雷撃を行うが先程と同じように機関砲で魚雷を破壊する。そのまま艦攻の背後に回りＰＬＳＬを撃ち込む。エンジンから出火し、２機は海面に突っ込んだ。

艦戦は４機、フィンガーフォーで突っ込んで来る。ＨＭＤを使いＡＡＭ―５（改）のシーカーを先頭の機体の熱源にロックする。

《Ｔｒｉｇｇｅｒ，ＦＯＸ２！》

右翼の翼端ランチャーからミサイルが発射され、真っ直ぐ命中、敵機は爆散する。数で不利なのでヘッドオンでガンファイトはせず、急上昇する。そのままインメルマンターンで敵編隊の後方につくと２

方向にブレイクした。２機編隊（ロッテ）を追尾する。その時だった。
「何だと!?」
ロッテの左側の機体が突如機首を真上に向けこちらに急接近して来る。
コブラ機動……
咄嗟に胴体に向けてＰＬＳＬを撃ち込む。後部胴体が真っ二つに折れ、墜ちて行った。もう一機はそのまま急降下で離脱を図る。そしてコブラされる前にブレイクした敵機が急降下してくる。ハイＧバレルロールで躱すと、そのまま降下してＰＬＳＬで撃墜する。最後の１機にバルカンを撃ち叩き落とす。
《Ｔｒｉｇｇｅｒ，ＲＴＢ》
秋月型姉妹に護衛を引き継ぎ帰投する。
次の任務は戦場の偵察任務だ。

～沖縄本島近海～
▪東ルートのＥ（エコー）隊、敵艦隊と目視戦闘距離に突入！支援を要請する！敵艦の前ではＬＣＡＣなど、花びらのボートで浮かぶお姫様同然だ、敵艦の排除を頼んだ▪！
「私達の出番ネー!!」
「気合い、入れて、行きます!!」
比叡と金剛が主砲を撃ち込む。一撃で敵水雷戦隊の主力艦を撃破する。さらに鎮守府から飛来したトーネードが機関砲で残る駆逐艦に攻撃、蜂の巣にした。
▪的確な支援、感謝する▪！
▪こちら西ルートのＷ（ウイスキー）隊、海岸の敵陣地から攻撃！トーチカを黙らせてくれ▪！
「了解、ゴースト隊攻撃開始！」
赤城のＡ―７ＥコルセアⅡが海岸のトーチカ群と敵戦車に攻撃を開始する。無誘導爆弾やロケットでも十分な戦果を挙げた。
▪航空支援、感謝する！行くぞ、怯むなー▪！
《こちらスカイアイ、海岸の要塞内トンネルから増援部隊が発進中！

トンネルを破壊しろ！》
「了解したわ、鎧袖一触よ」
加賀のＡ―４スカイホークがＡＧＭ―６５マベリックでトンネルを破壊する。
《目標の破壊を確認！》

海空の連携プレーでかなりの数の敵地上部隊と敵艦を屠った。
▪こちらＷ隊、上陸地点まで残り僅か！▪
▪Ｅ隊、丘に取り着いた！反撃は軽微だ。展開急げ！▪
《こちらスカイアイ、敵の海岸陣地を破壊しろ！》
▪ストライダー２、エンゲージ！▪
〈ストライダー４、エンゲージ！〉
《ストライダー３エンゲージ！》
Ｆ―１が急降下して来る。胴体下面の通常爆弾が投下され、命中する。そのまま２キロ先のトーチカ群もロケットで撃破し、対艦ミサイルで敵戦艦と敵空母を２隻ずつ撃沈した。
《スカイアイより全部隊へ通達、これより偵察機が進入する。》

艦隊上空を青い機体が高速で通過した。

Ｍｉｓｓｉｏｎ１２　カメラ・スプーク

上陸作戦の２ヶ月程前、鎮守府に1枚の張り紙が出された。
「新飛行隊編成に伴い航空機搭乗員の育成を実施するので志願者は書類を提出せよ」
数日後、３人が書類を提出した。
そのメンバーは、青葉、北上、北上が心配で一緒に申し込んだ大井だった。
ー数日後ー
３人が会議室に招集された。提督から説明を受ける。
「さて、今回の件は新しく偵察航空隊を新設する事が決定したのでそのパイロットを育成するというワケだ。」
北上が聞く
「妖精さんじゃダメなの？」
「国連軍始め横の繋がりで情報交換するにはやっぱり人間用の機体が良いんだ。だがお前らはまだ操縦桿すら触った事が無いからな……だから直々に訓練するんだ」
プリントを配布する。そこには訓練での使用機体が写真付きで書かれている。
初等訓練課程
九七艦攻
中等訓練課程
川崎　Ｔ―４
高等・実戦訓練課程
Ｆ―４ＥＪ

数日間の座学の後、訓練が始まった。
青葉と北上は基本的には偵察要員だがある程度は訓練が必要なので順に行う。離着陸から高度変更やエルロンロール、ループ、航法などのコツを叩き込む。
そしてＴ―４での訓練。空戦機動の基本を学ぶ。バレルロールや

インメルマンターン、スプリットSといった立体機動が加わり、肉体的にも非常に辛い。模擬空戦も行った。また、編隊飛行訓練も合わせて実施し、旋回や合流、ループも出来るようにしておく。
最後は高等練習機の代わりにF―4EJを使って実戦的な訓練を行う。操縦が非常に難しい機体なので、後席から指示を飛ばしまくる。

〜大井の場合〜
まずは離陸。この時から問題があった。F―4は燃料が満タンの時は重心と空力重心が近いため非常にピッチ(縦方向)安定性が悪い。そのため初心者が操縦すると機首を頻繁に上げ下げするのである。
つまり……
後席の人間はいきなり酔いと闘う事になる……
それを地上から北上と青葉が眺めている。
青葉「おー、飛びました!」
北上「うわ〜……めちゃくちゃ揺れてるよ……提督大丈夫かな?」
(その頃)
土屋「オーマイガー!!」
強烈な吐き気と格闘していた。

〜北上の場合〜
大井の離陸を見たからか多少マシだった。しかし着陸で土屋は声を荒らげる。というのも、F―4はエルロンリバースと呼ばれる低速域でエルロンを操作すると空気抵抗によって機首が反対側を向く特性があり、着陸時は基本的にラダーで向きを変えるのだ。
着陸時に北上がエルロンを操作した瞬間……
「バカ、エルロン禁止だ!ラダーを使え!」
前席とリンクしている後席の操縦桿を抑え、足元のラダーペダルを蹴飛ばす。機体はフラフラとしながら接地した。

～青葉の場合～
既に２人のフライトを見たので１番上手だった。しかしその程度で満足出来るワケも無い。
彼女が最も苦戦したのは水平旋回であった。
土屋「よーし、水平旋回行くぞ！２００００フィート、５００ノット、５Ｇでライトターンしろ！」
青葉「わかりました！ゴーゲート、ナウ！」
アフターバーナーを点火する。
青葉「ライトターン、ナウ！」
土屋「水平線を意識しろ、ワン・グランス、ワン・チェック！」
青葉「じ、Ｇがキツくて高度がブレますぅ…」
（着陸）
土屋「よしよし、ちゃんとラダー使ってるな……」
青葉「タッチダウン、シュート・ナウ！」
土屋「着陸上手いなぁ！」
青葉「ありがとうございます！」

全員がエプロンに集まった。
土屋「じゃ、１人ずつイニシャルフライトインプレッションを」フラフラ
大井「Ｔ―４と比べると揚力と機体に対するパワーが足りないわね……」
土屋「足りないのはお前の技量だろ…」オエェ
北上「機体がフラフラしてたけど、故障？」
土屋「故障じゃねぇよ！」
青葉「ゴーゲート！バスター！シュート！ずっと機体がピクピクしてました！」
土屋「青葉は初めての用語にグッと来たんだな…（？▽？；）」
その後空戦含む厳しい訓練を繰り返し、何とか偵察作戦が可能になった。

ーバンカーショット作戦当日ー

土屋のＦ―１が着陸する。飛び降りると直ぐにエプロンに置いてあるＲＦ―４ＥＪ改の前席に乗り込む。この機体は空自のＲＦ―４ＥＪ偵察機を改修したもので、空中給油への対応や新型ＡＡＭ統合等の若干の変更点が見られる。

もう一機は大井と北上が乗り込み、北上が後席で偵察員を務めている。胴体にはＬＯＲＯＰ（長距離偵察ポッド）とＡＮ／ＡＬＱ―１３１（Ｖ）ＥＣＭポッド、自衛戦闘用にＡＩＭ―７Ｍスパロー３発と主翼下にＡＡＭ―５（改）が４発搭載され機首の機関砲も６４０発がフルに搭載された。土屋の機体は後席に青葉が乗り、装備は大井機と基本的には同一だが左主翼下のＡＡＭ―５がＴＡＣＥＲ（戦術電子偵察ポッド）に、胴体下のＬＯＲＯＰがＴＡＣ（戦術偵察ポッド）に入れ替えられている。

無線で大井に連絡する。

《大井、お前のコールサインはガルーダ２、俺はガルーダ１だ》

▪了解です▪

～種子島沖上空～

《ガルーダ２、ブリーフィング通りお前は少し離れた場所から戦況を撮影報告しろ。こちらは近距離から電波収集と偵察を行う》

▪わかりました▪

▪ほーい▪

「大井っち、２０秒後に方位１７０に速度５５０、７０。バンクで転針」

「了解、北上さん！」

「じゃあ撮るね～」カシャシャシャシャシャシャシャシャッ

▪ガルーダ２、撮影出来たよ～…提督、あとはよろしく～▪

《ウィルコ！青葉、頼む》

《わかりました！》

ＫＡ―９５Ｂ高高度偵察カメラで真上からの写真を撮りつつＤ―

５００赤外線偵察装置での撮影も行う。
土屋は同時にＴＡＣＥＲポッドで電波情報を収集する。
その時、何かが指向性の電波を発している事に気付いた。
《コレは……》
地図で電波が向かう方向を辿る。
その先には艦娘が対潜哨戒をしている海域がある。
今、そこには上陸部隊護衛の為に村雨が居るハズだ。
《司令官！青葉、見ちゃいました！》
《何をだ!?》
見るとトンネルから多連装ロケットが１０両出てきて、同じ向きにランチャーを向けた。
咄嗟に機体のＥＣＭポッドでジャミングを行う。弾が多少拡がって発射されたので弾幕の密度は落ちたが発射を許してしまった。
《村雨！今すぐそこから離脱しろ！》
「ふぇっ!?それってどういう事なｎ……」ザー
最寄りのヘリに救助するように連絡する。そして……
《ちょっと司令ｋ「死ねやワレエェェェ!!」》
地上のロケットに機首の２０ｍｍ機関砲を叩き込む。
６４０発全弾斉射したので全目標破壊に成功した。
▪ちょっと提督～、何やってるのー？今ので敵機来ちゃったじゃ～ん▪
見るとレーダーに１５機の敵戦闘機を発見した。
今の騒ぎで集まったようだ。帰り道を塞ぐように飛んでいる。
《ガルーダ２、全ミサイル一斉射》
▪はい！▪
《▪ガルーダ１（２）、Ｆｏｘ１▪！》
近過ぎず遠過ぎずの約５マイルで発射する。３発ずつ計６発のスパローが向かう。更に３マイルで残るＡＡＭ―５を全弾発射する。
《全弾ヒット、残り３機！大井、先に戻れ！》
▪はぁ!?提督残弾無いでしょ▪?!

《弾なんざいらねぇ》
▪何言って……あ▪
土屋は何と敢えて敵機に背後を与えた。そのまま急降下する。ほぼ垂直降下の状態だ。
《司令官!・青葉、今日は艤装無いんですよー!!》
《墜ちやしねぇよ!・》
敵機はついてくる。あと数秒で墜落というタイミングで盛大にベイパーを引きながらピッチアップし、水面に手が届きそうな高度で立て直してそのまま急上昇する。後方を見ると1機は立て直しが間に合わず墜落、もう1機は立て直しのGに耐えられず空中分解、最後は急上昇した土屋の機体が生み出した水柱に突っ込んでそのまま墜落した。
▪うわ、マニューバキルとか……▪
《さて、帰るぞ……》
同時に村雨救助の一報が入る。沈んだり死んではないようだ……

偵察写真を元にその後の作戦が決められ、数日間で沖縄本島を奪還した。最終日まで艦隊と航空機は全力出撃しており、休む暇は無かった。かく言う土屋もそうである。連日の出撃をこなし、体重が減る程だった。

(数日後)
大淀「この書類で最後です」
土屋「はいよ…(判子押し)」
大淀「お疲れ様です、これで沖縄本島奪還作戦成功です!深海棲艦に占領された土地を奪還出来たのは初めてで……って、提督!?」
土屋「すまんがまた後で!お疲れ!」
すぐにクルマのキーを手に取りガレージに向かう。が……
「あれ、俺のトランザムが無い!!盗まれた!?」
急いで戻るとたまたま明石に会った。
「明石、俺のクルマ知らないか?」

「あぁ、それならココに……」
「!?!?」
そこには黒塗りのクルマが置いてある。
「明石……お前なんて事を……しょうがない、コレで……ガチャ」
その時だった
「はじめましてマイケル」

……は？

「明石、今誰か喋ったか？」
「ふふ、それはこのクルマの声ですよ！キット、自己紹介！」
▪はじめましてマイケル。私はナイト２０００、Ｋ・Ｉ・Ｔ・Ｔ（キット）とお呼び下さい▪
「いや、そもそもマイケルじゃねぇよ」
「すいません、さっきうっかりそう登録しちゃったので……」
「しょうがねぇな……」

キットに乗り込む。
▪マイケル、今日はどちらへ▪？
「鎮守府の病院までだ、飛ばすぞ！」
▪了解です▪
その瞬間、突然急加速する。
そう、このクルマは自動運転でもあるのだ。
さらに高い運動性も相まって強烈な速度で疾走する。
あっという間に到着した。

▪マイケル、目的地は何階ですか▪？
「３階だ」
▪ではお待ちを▪

次の瞬間、ルーフが開くと同時に土屋の体が放り上げられ村雨の病室のベランダに着地した。ドライバー射出装置が作動したらしい。

「ナイスコントロール！」

ベランダから病室に入る。

「村雨！」

病室に飛び込んだ土屋はそこで衝撃を受けた。

ＡＣＴ．１３　カッコカリ

村雨の病室に着いた土屋が目にしたのは、ロケットの破片で片目と左手と右脚を失った村雨の姿だった。流石の土屋も言葉を失った。
「提督、お疲れ様です♪」
いつもの調子で村雨に話しかけられ、我に返る。
「そ、その……謝って済む話じゃないが……済まなかった！俺がもっと早くアレを片付けていれば……」
上司と部下という立場がまるで逆転したかのように深々と頭を下げる土屋に村雨は驚いた。
「いいんですよ……ただ不運だっただけですから…」
残った右手で土屋の頭を撫でる。こんな小さな少女に気を使われて平然としてられるワケも無い。
「とにかく、こんな仲間１人護れない俺に何か罰を……もちろん死ねと言うならココで死ぬのも辞さない…いっそ直接殺ってくれ」
マテバを差し出すと、村雨はそれを受け取りテレビの横に置いた。
「そんな事……出来るワケ無いじゃないですか……村雨にとって大事な……たった１人の提督なのに……」
「でも……」
「さっき青葉さんに聞きましたよ？発射される直前、提督がジャミングしてロックオンを外してくれたって……もしそれが無かったら、今頃村雨は粉々になって海を漂ってますよ……」
右手で土屋を抱きしめる。土屋も段々と落ち着いてきた。
「でも何も無しっていうのは流石に納得出来ないから、何か頼み事とか聞いてあげたいんだけど…何かあるかな？」
「じゃあ１つだけ」
「何だ？」
「ここの皆は１人部屋じゃない？」
「そうだね」
「村雨、部屋に戻ったらこのままだと不便だし、手伝って貰うにも白露型の皆は忙しいし、だからね……」

「？」
「提督の部屋で……暮らしたいなぁ、なんて／／／」
「良いよ」
「……へ？」
「こうなったのは俺のせいでもあるしいいよ。あんまりオシャレな部屋じゃないけど…」
「ありがとう提督♪」
こう言ってはいるが本人もカラ元気に近いのだと土屋は感じた。
「だが2・3日待ってくれ、部屋の準備が要るんだ」
「もちろん大丈夫よ♪」

自室に帰ると、まずは家具の調達と配置を考える事から始めた。すると7人が続けて入ってくる。秋月と涼月と瑞鶴と大鳳と吹雪と二航戦の2人だ。この7人の共通点を思い出す。そして思い出した。それぞれ対空射撃の撃墜数（2人が同率1位）、空対地射爆撃、飛行隊毎の撃墜数、対潜戦、前線までの往復の航路の制空というジャンル別MVPだ。賞品は何か1つお願いを聞くというものだ。

土屋「皆揃ってどうした？」
吹雪「司令官、お願い決まりました！」
大鳳「私も決まったわ」
秋月「司令、秋月も大丈夫です！あと涼月と同じお願いでした！」
瑞鶴「私も！」
蒼龍「私達もだけど、正直全員同じお願いなんだよねぇ…」
土屋「全員同じ？何だ？」
涼月「実は……かくかくしかじか」
土屋「は？」

とんでもないお願いが来た。さっき村雨が来る事になったのにさらに俺と同棲の申し込みだ……まだ増えるのか……
いや、それよりもこの男女比！

某ラノベかよ！
あと部屋のスペースが……（）

しかし断ると可哀想なので、何とかすると引き受けてしまった。大急ぎで妖精さんに家具を発注し、寝床テトリスを始める。１つしか無いベッドは村雨に当て、それ以外の全員は床に布団敷いて寝る事にした。何とか同じ部屋で寝れるが、窮屈なのに変わりは無い。また隣の使ってない部屋と繋げ、より広くする工事も妖精さんに頼んでおいた。それでも1週間は現状で生活する事になる。
「仕方ないかぁ……」ハァ
年頃の女の子の欲しいものがわからず、とりあえず「何でもいい」と言った事をちょっとだけ後悔しつつも、自分と同じ部屋に居たいと言われるのは結構嬉しかったりしている。

～数日後～
全員が部屋に来た。とりあえず荷解きをして、ホームセンターで買った棚に服等を仕分ける。
瑞鶴「さて提督さん！今日は何月何日？」
土屋「ん？１２月の２３日だが？天皇誕生日以外に何かあったか？」
瑞鶴「じゃあ買い物行こっ！」
土屋「何だ？何かあるのか？」
土屋以外全員「……」（。д。）ポカーン
蒼龍「いや提督、流石に嘘でしょ？」
飛龍「ここまで鈍いとは……」
吹雪「し、司令官！あ、明日が何の日かは分かりますよね？」
土屋「明日？２４日だろ？一体何が……あっ、クリスマスか！」
涼月「今更……」
土屋「いや、すまんすまん……昔から1年の中で一番縁のないイベントだったから……」

秋月「じゃあ司令の初めてのクリスマスパーティーしましょう！」
瑞鶴「そうしよーっ！」

全員乗れるクルマが無かったのでマイクロバスで買い物に出掛けた。いつものイ○ンモールだ。買う物別で別れ、手分けして買いに行く事になった。俺は秋月型の3人を連れて百均でクラッカーやその他もろもろのパーティーグッズを買い揃えた。

鎮守府に戻り準備をしていると、大淀が小包を持って来た。
「提督、防衛装備庁からお荷物が届いております」
「すまんな、ありがとう……なんだこれ？」

大淀が小包と封筒を渡してきた。小包の中身は小さい箱のようだ。
まずは封筒から開けた。
「コレは……」
それは何と村雨の改二の素案だった。むらさめ型護衛艦の装備とこれまでの戦闘記録を元に性能のバランスに優れた艤装にするらしい。何より改二改装で欠損した四肢も元に戻るそうだ。
すぐ判子を押して明石に作業を命じた。
「次はこっちか…」
中にはどう見ても結婚指輪の箱と書類が入っている。
「説明書付いてるな……どれどれ？『この指輪は艦娘に装備することで練度を大幅に向上させ、さらに燃費の改善や一部スペックも上昇する。ただし装備すると外せず、また提督も同じ指輪を着用する必要がある。そのため使えるのは1人だけとなる。相手は慎重に選んで欲しい』か……ってコレ完全に結婚じゃん……」
そう呟いた瞬間、その場に居た艦娘達が一斉にこちらを向いた。
瑞鶴「てーとくさん！だだ、誰に渡すの……？」
土屋「お前……落ち着け、目が怖いぞ…そうだなぁ、まだ決めてないな」
蒼龍「じゃあさ提督、どんな娘に渡したいの？」
土屋「そうだなぁ……やっぱり俺の事を一番思ってくれる娘かな

…」
飛龍「なるほどねぇ……提督、私達用事出来たからパーティーはやめとくね？」
土屋「お、そうか…」
その後、その場に居たメンバーが次々と参加を取りやめた結果中止になってしまった。

～２４日～
今日はせっかくなので全員休みにした。俺は書類を片付けるために執務室に籠ってるが。
「すまんな秋月、手伝わせて…」
「いえ、大丈夫です！シュッと終わらせましょう！」
「そういえば他の皆はどうしたんだ？」
「そ、それが……司令の御相手には誰が相応しいか会議をしてるみたいで……」
「秋月はいいのか？」
「はい！秋月、司令と一緒に居る方が楽しいです！」
「……」
「司令？」
「あぁいや、何でもないよ」
「そうですか♪」
～夕方～
「終わった～！」
「お疲れ様です、司令♪」
「秋月もありがとな～！どうだ、一緒に飯でも…」
「え、いいんですか?!」パアァ
「おう！」
ケータイで予約出来る店を探す。
「うーむ……」
「どうですか？」
「焼肉屋なら取れる」

「じゃあそこにしましょう！」
「秋月が良いならココで！」
予約し、クルマで15分ほどかけて向かう。
2人とも朝から仕事があったので空腹の極地に達しており、食べ放題の焼肉屋は非常にありがたい。
「さて、着いたし食うぞ～！」
「ですね！」
座敷席に通され、端末で注文して来た順に焼いていく。
たまにはこんな贅沢も良いだろう。
秋月の食べっぷりが中々良い。駆逐艦とは思えないぐらいだが、年頃の女の子が美味しそうに頬張る姿は見ていても飽きない。
「決めた……」
「…？司令、何か仰いましたか？」
「いや何も？」
「そうですか♪」モグモグ
「秋月、タンにねぎ塩乗せてみな！旨いぞ！」
「分かりました♪パクッ…あ、とっても美味しいです！」

～その日の晩～
「司令、秋月をお呼びですか？」
「あぁ、えっとだな…」
「あの、対空戦に不備が……」
「いや違う違う！昨日してた話、覚えてる？」
「あの指輪ですか？あ、もしかして翔鶴さんに？呼んできます！」
「い、いやそうじゃなくて……」
ポケットから指輪の入った箱を取り出す。
「ストレートに言おう。俺と結婚……してくれ」
「……？？？」
「秋月？」
「もしかして…これ…ありがとうございます…！」

断わられなくて良かった……
「司令、改めてよろしくお願いします♪」ダキッ
「あぁ、こちらこそ！（かわいい…／／／）」ギュウッ
我ながらチョロい男だと思いながらも無事結婚出来た。
スピード婚だが、精一杯彼女に尽くしていこうと心に誓った。

ＡＣＴ．１４　ヤセンカッコイミシン

秋月と結婚した。
今は執務室兼自室にいる。目の前では泣いて喜ぶ秋月がいる。
控えめに言ってめちゃくちゃかわいい。我慢出来ずに彼女を抱きしめる。お互い真っ赤になるが気にしない。
「あ、あの…司令…／／／」
「うん？／／／」
「そ、その…指輪のお礼を…」
秋月が背伸びして唇を重ねてくると、そのまま舌を入れてきた。応えるように舌を絡める。どれぐらいの間、口付けをしていたのか。１分か２分かそれ以上か、あるいは一瞬なのか。秋月が離れると、そのままもたれ掛かるようにベッドに押し倒してきた。
「えっと…／／／今からのはその、秋月からのクリスマスプレゼントです…／／／」
こうして長い長い聖（性）夜が始まった。

―翌朝―
秋月より一足早く目が覚めた。隣では自分と同じく産まれたままの姿の秋月が静かに寝息を立てている。シャワーを浴びたい所だが、隣の秋月が腕に抱きついているので動けない。優しく抱きしめつつ昨夜の秋月の姿を思い出す。普段の彼女からは全く想像出来ない程の激しさで、更に１度で満足せずにお代わりを強請り、こちらが力尽きてもなお搾ろうとした程だ。
そんな事を思い出していた時、突然ドアが開いた。

秋月の長１０ｃｍ砲ちゃんだ。主が心配で見に来たらしい。
そして寝室に来た瞬間……
長１０ｃｍ砲ちゃん、怒りの乱射が始まった。

「どわぁっ!?」
土屋の声で飛び起きる秋月。
「ちょ、落ち着け！」
飛び交う砲弾
「長１０ｃｍ砲ちゃん、誤解だから！」
崩れる壁
「とりあえずストップ～！」
天窓付きになる天井……

結果から言うと部屋はズタボロ、同棲希望者の荷物が無事だったのがせめてもの救いと言えるだろう。長１０ｃｍ砲ちゃんは秋月が指輪を見せて説得した。

部屋の修理に夕張を召喚。
「うわ～、派手にやられてますねぇ……『ジオフロントなのに空が見える……』って感じですね～…」
「夕張、そのセリフなんか聞き覚えが…（）」
「とりあえず作業しますね～」
「（うやむやにされた…）」

同棲希望者の荷物はそれぞれ引き揚げてもらい、ひとまず同棲は無しにした。それと修理が終わるまでは秋月型の部屋に居候する事になった。涼月と照月は目を丸くしてたが、まるで自分の事のように喜

んでいた。
照「それで提督とはどうなの、秋月姉？」
秋「どうって……／／／」
照「提督とシたんでしょ？」
秋「あぅぅ……／／／」
土「照月、それぐらいにしてくれ……こっちも恥ずかしい…／／／」
涼「これなら大丈夫そうですね♪お二人とも反応が似てますし…」
とりあえず妹が居るなら昨日のような夜戦（意味深）は起きないだろう。快眠出来そうだ。
部屋のちゃぶ台で書類を手早く片付けていく。全て終わらせた所で秋月が追加の書類と雑誌を持ってきた。
「あの……司令、これを……／／／」
「ん？どした秋月……ってコレは…／／／」
見せてきたのは結婚式場のパンフや旅行会社の広告の束だ。
「せっかく結婚したんですから、式ぐらい挙げましょう？」
照月と涼月が集まってきた。
「なになに？式の用意？」
「秋月姉さんも遂に挙式ですか？」
４人でカタログを見ていく。
「ちょっと待て、予算的に今すぐは厳しいぞ…」
「そんな…」
「うーん……」
その時、携帯が鳴った。
「ちょっと失礼……はいもしもし？」
「あ、提督！明石です！ちょっとご相談がありまして…」
「わかった、すぐ行く」
秋月達に明石に呼ばれた旨を伝え、工廠に向かった。
「そんで明石、何なんだ相談って？」
「実はですね、色々機材を追加するので今あるものを処分したり並べ替える必要がありまして」
「ほう」

「男手が欲しいので宜しければ手伝って頂きたくて……あ、もちろんバイト代は出します！」
「バイト代出るのか……時給は？」
「時給……２０００円でどうです？作業は３週間で…」
「よし乗った！」
とりあえず翌日から早速作業に参加する事にした。

―翌日―

工廠に来た。早速着替えるがツナギが某有名レーシングチームのものしか無かったので妙に浮いている。
「さて提督、まずはＴＢＭＫＹからですよ！」
「なんだそれ？」
「ツールボックスミーティング危険予知ですね」
すると工廠の妖精さん達と夕張が集まり、置いてあった工具箱に腰掛けた。なるほど、だからツールボックスミーティングなのか。というか何でツールボックスミーティングは英語なのに危険予知は日本語なんだよ。
「えーまずはそれぞれ危険だと思った点を挙げてみてください！」
「はーい！」
「はい夕張！」
「出入口のとこに置いてあった荷物でつまづきました」
「うーんそれは危ないですね～」
「解決策は？はいクレーン妖精さん！」
「（荷物をどけるまでは注意書きするのが良いかと！）」
「確かにそうですね！ではそれすぐやりましょう！他には……はい提督！」
「いや、前から思ってたけど夕張も明石も工廠ではヘルメットしろよ」
「……では今日もゼロ災で行きましょう、ヨシ！」
「いやヨシ！じゃねぇだろ無視すんなし（威圧）」
「提督もご安全に！」
「待てや」

一度痛い目見ないと分からないようなので説得は諦めた。自分はしっかりとヘルメットを付けて作業に入る。

―4時間後―

「さて提督、お疲れ様です！今日はこの辺にしましょう」

「うーい、お疲れ～」

そのままドックに向かう。今日は建造が終わった艦娘と挨拶をする事になっているからだ。更衣室で適当に着替えて出迎える。

「秋月型駆逐艦、その四番艦、初月だ。お前が提督か。いいだろう。僕が行こう。」

「初月か、よろしく頼む。ここの指揮を執っている土屋という者だ。好きに呼んでくれ……それにしても初月って建造出来たの？」

工廠の妖精さんに尋ねると、本来は建造出来ないが妖精さんがうっかりドックに牛缶を落として壊してしまったが建造を止められず放置してたら出来たらしい。なんじゃそりゃ。

「初月の部屋はココ、秋月達と同じ部屋だ。ワケあって俺も同室となる」

「なるほど、了解だ」

初月を連れて部屋に戻る。

「ただいま～♪」

「あ、司令！おかえりなさい！」

「提督おかえり！」

「おかえりなさい♪」

「そういや、今日から新しい仲間が来るぞ」

「あ、そうなんですか？」

「入ってくれ！」

初月が玄関を開ける。

「今日から秋月型の初月が戦列に加わる。皆よろしく頼ｍ…」

「「初月！」」

「お初さん！」

姉妹艦だからか3人同時に初月を抱きしめる。
再会を楽しませてあげようと一度部屋を出てそのまま特に目的は無いが格納庫に向かう。
目の前にはメビウスのマークが描かれたＦ―４Ｅが置いてある。フライトヘルメットを被りコクピットに座ってバイザーを下ろす。こうすると何故か気分が落ち着くのだ。
前回の作戦以来あまり飛んでないので何となく空が恋しく思えた。やはり陸や海より空の方が自分には合っているのだろうか……
これまで飛ぶ事しか無かった自分がこの半年で数百人の女の子を指揮する立場になり、更にイベントや作戦の立案まで様々な仕事をこなす事になろうとは誰が想像出来ただろうか。　しかもそこでお嫁さんまで貰うとは誰が想像出来ただろうか……
そんな事を考えつつボーッとしていると、足音が聞こえてきた。

「あ、提督居たよ！」
「司令、こんな所に居たんですか！」
「秋月姉さん、見つかったんですからいいじゃないですか…」
「全く…僕らに気を使ったのか？」
秋月型の４姉妹だ。初月と盛り上がってる間に居なくなったので探しに来たのだろう。
「それにしても提督、コレは……」
初月がＦ―４Ｅ（ファントム）を興味深そうに見上げている。やはりジェット戦闘機は防空駆逐艦としては気になるらしい。
まだ外は比較的明るい。燃料は即応態勢を整えているため満タン。ならば……
「よし、気になるなら後席乗ってみるか？」
そう言うと４人の目が輝き出した。ジャンケンで勝った順に乗る事にした。
「「「じゃーんけーんポンッ！」」」
「あ、私からですね…♪」
まずは涼月が乗る。フライトスーツに着替えた涼月を後席に乗せ

ると、妖精さんがエンジンスタートの作業を開始した。タービンの唸り声が聞こえ、更に回転数を上げていく。エンジンスタートの作業が終わり、エルロン、スポイラー、ラダー、フラップ、エレベーターのチェックをして滑走路へタキシングする。
《メビウス1、呉タワー、リクエストハイレートクライム》
《呉タワー、メビウス1、クリア・フォー・ハイレートクライム》
「よっしゃ、涼月行くぞ！吐きそうなら袋使えよ！」
「あ、はい！」
「ＯＫ、ゴーゲート、ナウ！」
「ひゃっ…ぐうっ……」
アフターバーナーを使用して急加速する。離陸して脚を上げてからも滑走路の路面スレスレを飛び、滑走路端で急上昇機動を取る。
「ひゃあぁぁっ！」
「どうだ？コレでもまだ全力じゃない上に旧型機なんだぜ？」
「す、凄いです……思った以上です…」

その頃地上では……
「すごーい！めっちゃくちゃ速いよ！」
「あんな加速力なんて……」
「姉さん大丈夫だろうか……」
「もうあんな高度まで……見えなくなっちゃった…」
「あ、戻ってきた！」
急降下して滑走路上空で立て直し、そのまま鎮守府の真上を飛び抜ける。
「涼月、大丈夫か？吐きそうになってないか？」
「いえ、今の所大丈夫です……わ、もう広島市内に……」
「もう少ししたら夜景が見れるんだがな、今日はちょっと早かったな…時間があれば高高度の景色も見せてやりたいが皆待ってるからこれぐらいにしとくか…」
鎮守府に戻って上空を数回旋回して着陸する。
今度は照月の番だ。

「照月、４Ｇで右旋回行くぞ！」
「うん！」
「ライトターン、ナウ！」
「うっ……ぐっ……」
「辛いか？」
「大丈夫……」
「じゃあ今度は……」
３連続の左エルロンロールを行う。
「きゃあぁぁぁっ!?」
「おっと、すまんな」
「ビックリしたぁ……」

次に初月の番だ。
さて、まずは高度１００００ｆｔ、速度５００ｋｔから大きく左バレルロールを行う。
「おおぉぉぉ……」
「どうだ？中々面白いだろ？」
「あぁ、こんな景色は初めてだ…いつもお前はこんな景色を見てるのか？」
「うん、昔からね…」
「昔から…？提督、お前は海軍……もとい海自の人間ではないのか？」
「こう見えても昔は空軍でね…」
「ほぅ、なるほどな…」
過去の話をしつつ大きくループする。さらにそのまま旋回して瀬戸内海に出て、しまなみ海道を遠くから見て戻ってきた。
最後に秋月だ。かなり暗くなっている上に燃料も減っているので派手な機動は控えめにする。
その代わりに少し遠くへ足を伸ばし岡山市上空に飛ぶ。
「もうすぐ夜景が見える……ほら、あれだ。岡山市の夜景だな」
「わぁ！すごく綺麗ですね、司令！」
「一番最後だからあんまり派手な機動は出来ないけどな……まぁでも

こういうのも良いもんだろ？あっちには瀬戸大橋も見えるぞ」
「おぉー！」
その後、燃料タンクがほぼカラになったので帰投して５人で夕飯を食べ、皆でのんびりと床に就き、快眠……となるハズだった。

そう、俺の中では。
初夜が余程良かったのかその晩に秋月に襲われた。更にその音で起きた照月達も途中参戦し、手足を固定されて一晩中搾られた。
なおその事には翌朝気付いた。目が覚めると手足が動かせず、体は重たく、布団には生まれたままの姿の秋月型姉妹が倒れていた。後で事情聴取をして何をされたか判明した。
土「秋月はともかく……お前らなぁ……」
涼「ごめんなさい…」
照「照月も提督の事が……好きで…つい／／／」
初「ね、姉さん達に流されてしまって……」
土「初月、それ一番問題ある（）」

全く……

Ｍｉｓｓｉｏｎ１５　《目標に高エネルギー反応！》

「さてと、こんなもんか……」
書類を一通り片付けた土屋は執務室（というか秋月型の部屋）で書類を大淀に渡してその日の仕事を終えた。
そろそろ次の作戦が来ると読んで資源を貯めている。
しばらくすると大淀が駆け込んで来た。
「提督！大変です！ハァハァ」
「どうした?!落ちつけ！」
「大本営より緊急入電、『台湾に向けて敵艦隊が移動中との情報有り！強力なＥＣＭが発生しているため状況不明、直ちにスクランブルしてこれを攻撃、着上陸作戦を頓挫させよ』との事です！」
「マジか……台湾なんて中国と揉めるからって大した戦力は無いんやぞ……」
偵察衛星からの写真で敵艦隊を発見すると、大体の進路の予測を立てる。
「まずはガルム、ラーズグリーズを中心にとにかく足の速い対艦攻撃可能な機体を向かわせろ！それから艦娘は……間に合わないか…」
ふと外を見るとＣ―２が駐機されていた。
「よっしゃコレやな！」
臨時編成を組んで招集を掛け、Ｃ―２で空挺降下させる事にした。
招集したメンバーが集まるまでに自身も素早くフライトスーツに着替え、装備を整える。
「よーし集まったな、今から配るプリントが作戦概要だ。詳しい説明はしない。今回はビュッフェスタイルのパーティーだ。反撃態勢が整う前に好きな皿を取れ。ただし高級料理を狙って行けよ、マナーは気にするな！それと帰還率は１００％だ、以上！パラシュートの使い方は機内でレクチャーを受けろ」
ものすごく雑なブリーフィングを終えると格納庫にダッシュする。

既にエンジンがかけられたＦ―２スーパー改に飛び乗る。装備は胴体下に無人戦闘機ＭＱ―１０１を１機、主翼下にＡＳＭ―３を４発とＡＡＭ―５（改）を４発搭載している。かつてロッキード・マーティンが空自に提案したタイプと同じ型式名だが、操縦装置やレーダー、コクピット等の電子機器の更なる強化とパルスレーザー式機関砲の装備、無人機との連携能力等が与えられた。エンジンも防衛装備庁の試作したエンジンの技術を活かして推力が大幅にアップした。

格納庫から出ると空中給油を受けつつ全速力で向かう。途中で先行部隊からの無線が入る。

《敵上陸艦隊の護衛部隊を旗艦以外撃破！敵航空戦力はほぼ壊滅！こちらの被害はゼロ！上陸艦隊への攻撃を続行すｒ……》ザ―ッ

無線が途切れた。高高度からＥＣＣＭを行っていたＡＷＡＣＳから情報が飛び込んだ。

《護衛艦隊の旗艦は新型深海棲艦と確認された！目標が巨大なエネルギー反応を発した直後に味方機が消滅、残ったのはガルムとラーズグリーズとＳｕ―３３が４機！》

消滅だと？ＥＣＭで反応が消失したのではない。それならば全ての機体をロストするはずだ。僚機と共に全速力で向かった。

―台湾沖―

「クソ、どこだ……」

探知されるのを避けるためにレーダーを使わずに唯一残った護衛艦隊の旗艦を探していた。見えるのは味方機……『だったもの』ばかりが浮かぶ海だけだ。見るとどの残骸も溶けたような痕跡がある。また何かに正面衝突したような機体も発見した。

「何があったんだ……？」

その直後だった。海中から突如これまでに確認された事の無い深

海棲艦が現れた。右手のロケットランチャーのようなものから艦載機が5機打ち出された。見事な編隊を組んで急旋回しこちらに向かってくる。隊長機と思われる先頭の機体だけが翼端から鋭く雲を曳いていた。

見た目はヲ級の艦載機に似ていたが、カナード翼と偏向パドルを持つノズルを装備している。そして何より……

翼端が黄色く塗られていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ１６　Ａｑｕｉｌａ

５機の編隊が向かってくる。こちらは同数だが全員対艦装備だ。また上陸部隊を潰さねばコイツらを倒しても意味が無い。ならば答えは１つだ。

「俺以外の機体はまずはＡＳＭ―３を全弾叩き付けてこい！それまで時間を稼ぐ！」

４機のＦ―２改が南に向かう。３機がそれを追跡するが更にその後ろからＡＡＭ―５を撃ち込もうと後ろに占位する。すると予想通り残りの２機が食い付いて来た。旋回するフリをしてＨＭＤのオフボアサイトモードでロックオンし、ウェポンリリースの操作をする。レールランチャーからミサイルが放たれる。３発発射したが、流石にフレア等は無いのかギリギリ全弾命中、撃墜に成功した。しかし推力偏向の無いＡＩＭ―９Ｌのような旧型のミサイルであれば、あるいは僚機に釘付けになっていなければ回避されて効果は無かっただろう。回避能力はズバ抜けて高いようだ。

ＡＡＭは最後の１発、また後方にいる２機は仮にＳｕ―３７と同等の性能とすれば推力や翼面荷重、機動性、あらゆる面でこちらが劣っている。さらにこちらは１発１トンのＡＳＭ―３を４発も提げている。

「しゃーない、アレやるか…」

Ａ／Ｂを使いながら操縦桿を少し前方に突いて、ＡＯＡ（迎角）がゼロになるように操作する。機体は少しずつ機首を下げて降下しながら加速するアンロード加速と呼ばれるテクニックだ。空気抵抗を減らして最低限の高度損失で加速出来る。距離を取って海面スレスレまで降下すると反転して急上昇する。そのままインメルマンターンをしてヘッドオンになり、最後のＡＡＭ―５を撃ち込む。向こうからも撃ち返してくるので照準を外さないようにしつつバレルロールで回避する。命中。機首を破壊された機体はそのままスピンして墜落した。

残る１機とすれ違う。その瞬間、一瞬だがハッキリと見えた。

その機体には黄色で「１３」と書かれていた。

「なるほど……沈んだ艦の怨念が実体化したのが深海棲艦なら機体も落とされた機体の怨念という事か……」

インメルマンターンをもう一度行い、相手と距離を取る。こちらの方が高度の面で優位だが、機体のハンデはファーバンティのあの時より大きい。あの時はＡＭＲＡＡＭを満載したＦ―２２、今はＡＳＭ―３を４発も提げたＦ―２、オマケに胴体下のＵＡＶこそあれど空対空ミサイルは尽きている。５１２発の２０ｍｍ機関砲弾と８００発のＰＬＳＬ、ＵＡＶ１機で黄１３に勝つにはどうするべきか…

土屋はＵＡＶの活用法が鍵になると読んでいた。しかしＵＡＶの装備は２発のＧＢＵ―３９、つまり小型の精密誘導爆弾とパルスレーザー機関砲だけだ。

「せめて１発はサイドワインダーにすれば良かったな…」

考える暇も無いので急降下してヘッドオンですれ違う。

太陽を背にしてＰＬＳＬを発射しつつすれ違うが、相手もジンキングで回避してくる。

すれ違った瞬間に敵機とは反対方向に９Ｇピッタリで旋回しなが

ら反転上昇、２サークルファイトを選択し、ハイヨーヨーを織り交ぜて追尾を開始する。３／４ループのような機動からロールして敵機の背後に付ける。

１３は降下するこちらに対して上昇で対抗する。つまりこちらの機体の下が完全な死角になる。その瞬間にＵＡＶをリリースする。これなら少なくとも最初の攻撃は奇襲攻撃に出来る。

こちらも上昇して背後につく。絶妙にこちらの機関砲の照準から外れるようにブレイクとシザース、ジンキングを続ける。１２回目の右旋回から立て直した瞬間に敵機は機首を持ち上げ、そのままこちらに機首を向けた。クルビットだ。かつてのファーバンティでの空戦の記憶からこの機動のタイミングを完璧に読んでいた土屋は、機体を左に９０。バンクさせ、そのまま左のラダーペダルを蹴飛ばした。機体は横滑りして進路が大きく下に向いた。スリップと呼ばれる基本的な防御機動だが、これを実行している間は機関砲の照準が困難になる。

今のクルビットのタイミング等のデータをＭＱ―１０１に転送しておく。その時、レーダーに新たなブリップが表示された。対艦攻撃に向かった僚機だ。これならばサッチ・ウィーブが使えるかもしれない。自らが囮になるという旨を伝え、回避機動を続ける。

左旋回、１３の位置を目視で確認しその機関砲の砲身がこちらに向いているのを確認すると素早く照準線から外れるように機動する。

僚機の追従を確認しつつ切り返して右旋回する。それを数回繰り返す。僚機が適宜攻撃しているが当たらない。やはり並のパイロットではついて行けないのか……

▪ＵＡＶとの連携に切り替える、１度離隔しろ！▪

▪ウィルコ！▪

僚機を下がらせる。回避しながら考えた作戦を実行する。対８４９２飛行隊の戦闘で使ったあの方法を使おう。

照準線から外れつつ距離を詰める。向こうが攻撃すれば破片を浴びて向こうもダメージを受ける距離まで減速しつつ旋回する。その瞬間、エアブレーキを開いてスロットルを閉じ、更に旋回で一気に失

速させる。１３は衝突を回避しようとコブラを行った。やはり先程と同じタイミングだ。次の瞬間、１３の機体が爆散した。

何をしたのか、それは実に簡単だ。コブラを誘発し、１３がコブラをした瞬間にＭＱ―１０１が追い越しざまにＧＢＵ―３９を投下したのだ。メガリスでの空戦で、土屋はコブラ機動の弱点に気付いていた。それは被弾面積の大幅増加とほぼホバリングになる事で生まれる隙だった。そこを狙ったのだ。

命中さえすれば厚さ数ｍのコンクリートを貫通する爆弾を浴びて無事で済む事は有り得ない。そしてこの空対空爆撃というのは土屋がクルイーク要塞攻略作戦の帰りに８４９２飛行隊の奇襲を受けた際に使った方法だった。

そして残るは敵の新型艦。どちらにせよ燃料が無いので本格的な攻撃は不可能だ。残弾を叩き付けて軽く偵察してから帰投する事にする。

４発のＡＳＭ―３が発射される。命中するはずだった。だが誰も予想してなかった事態が発生した。弾着まで数秒という所で目標は謎のシールドを展開、４発のうち３発を防ぎ、残る１発も耐えたのだ。見ると多少の傷だけでヒビすら入っていない。ＭＱ―１０１のＧＢＵ―３９もＰＬＳＬも弾いた。

更にある事に気が付いた。深海棲艦の重巡以上の艦には１２ケタの製造番号と思しき番号が書かれている。

だがこの目標には番号がどこにも書かれていない。このヲ級をベースにしたと思われる新型艦、コレは想像以上に危ないと確信した。鈍重な輸送機でこの近くに空挺降下させるのは無謀と判断し、全機撤退の指示を出した。上陸戦力はかなり削られているのでしばらくは台湾は大丈夫だろう。

帰投すると、大淀から信じられない一報が飛び込んだ。

Ｍｉｓｓｉｏｎ１７　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｎｏ．

大淀と通信室に来た。
「それで、何があったんだ？」
「それが……深海棲艦から通信が…しかも暗号化されてません」
「……は？」
以前から一部の強力な個体が言葉を使うという情報はあった。しかし直接こちらに話し掛けて来るとは想定外だ。
「で、その内容は？」
「それが……」
メモを渡してきた。通信の内容が書かれている。
『一昨日、我々が開発した新型艦が実戦試験中に命令系統を外れ、突如制御不能になった。直ぐに破壊作戦を展開したが、新開発の強力な装備を持つため破壊出来なかった。制御を受け付けないため、このままだと民間含めた無差別攻撃が発生する。その為、貴官らの力を貸して頂きたい。条件付きでも構わない。早めの返信を乞う。』
「提督、どうされますか？」
うーん、としばらく考える。
「よし、こう打電してくれ。『了解した、そちらの要請に応じる。しかし条件がある。それはそちらが欧州と台湾で実行している上陸作戦の即時中止・投降とその新型艦についての全てのデータ等の開示、全軍の武装解除が条件だ。これはこちらがこの作戦に集中する為にどうしても必要な事だ。それが確認され次第すぐさま作戦行動を開始する』とな」
「まさか応じるんですか!?」
「アイツらの言う新型艦と俺は交戦した。あの厄介さを知ってる。さっきの作戦の途中の衛星画像を見てみろ。護衛艦隊の旗艦なのに上陸船団を護衛してない。あの新型艦は何らかの方法で味方の護衛艦隊から離脱したのだろう。」
「ですがその証拠は……」
「さっきの俺の機体の無線のデータを聞き返してみろ、俺もびっくり

の音声が記録されてる」
土屋はＦ―２の無線記録が入ったＵＳＢを手渡した。帰投中に気になり聞き返していたが、余りに強烈な内容だったのでコピーしたのだ。大淀はそれをＰＣで再生する。

《本艦は現時刻をもって、護衛艦隊より離脱する！》
・何を言ってる・・・!?
《分からんか》

「……提督、コレは…」

「あぁ、つまりアレは第3勢力、共通の敵だ」
「では……共同戦線を張るんですね…」
「そうなるな」
　大淀は先程の通信を送る。すぐに返答があった。
《了解した、すぐに投降と地球上で活動する全部隊の武装解除、並びにデータ提供を行う。我々を助けて欲しい》
「めっちゃ反応早いな……ツイ廃かよ……」
「提督、武装解除させたなら上手くやれば終戦に持ち込めるのでは？少なくとも休戦協定締結のチャンスかもしれません」
「それはまぁ後だ、向こうはこっちの頼みを聞き入れた。敵とは言えこの反応は賞賛するべきだ。なら今度はこちらが応える番だ」
　衛星画像を確認する。既に動いてるようだ。国連軍からも続々と投降したと連絡が入る。

「よし大淀、向こうがこっちの要求に対応してる間にこっちも作戦を考えるぞ」
　全員をブリーフィングルームに集める。
「よーし、全員集合したな？まず、普段のブリーフィングであれば俺から作戦を伝えるのだが今回は違う。恐らく通常攻撃では破壊不能な目標だ。その為まずは、全員の意見を聞きながら作戦立案から始める。そうすれば全員納得して作戦に参加出来るしな」
　ＵＡＶが撮影した敵艦の画像をモニターに出す。
「コイツが件の目標だ。見ての通りヲ級をベースに大幅な設計変更を加えたものと思われる。もうじき開発データが届くが、それまでに現時点で分かってる事を伝える。」
　頭の艤装を指し棒で指示する。
「通常のヲ級であれば、ここに製造番号が１２桁で記入されている。だがこの個体は見た限りそういった表示が無い。よって今作戦では当該目標を、無号機（Another No.）と呼称する。それから、注目すべきはココだ。」
　無号機の顔面を拡大する。目の部分が六角形を組み合わせた形に

なっている。隙間なども見当たらず装甲板のような素材に見える為、恐らく視界は無いだろう。
「この形状からして、目標は盲目の可能性がある。しかし、ＡＳＭ―３をシールドを展開して受け止めた。レーダー等の機材が優れているか何か別の方法で周辺の状況を把握してるのだろう」
　そこまで説明した所で、データがヘリで届けられた。
　土屋がそれを一通り読んだ所で、その資料をモニターに表示する。
「まず、１番の問題であるシールドの展開場所を先に伝える。この肩の部分の装甲板、コレが発生装置らしい。それから状況把握能力だが、光学・音響・電波・赤外線を全身を駆使して計測する、つまり全身がセンサーらしい。よって先にセンサーを潰すのは不可能だ。先に肩のシールド発生装置を破壊する方が好ましいだろう。問題はその方法で、何か意見はあるか？」
　手が幾つか上がる。
「はい飛龍！」
「えーと、ステルス攻撃機で誘導爆弾とかどう？」
「ダメだな、回避されやすい上に音でバレるな。それにステルス性だって絶対ではない」
「はいっ」
「お、古鷹か」
「はい、長距離からの砲撃はどうでしょう？」
「悪くは無いが…」
　別の画面を見せる。ＵＡＶ等を使って威力偵察を試みた時の記録だ。
「このデータからわかるように、一定範囲内の敵を問答無用で排除するようになっている。通常砲撃では射程圏内には入れない。先の航空攻撃では、ポリ窒素式の空中炸裂弾頭による範囲攻撃と熱線による射撃でこちらの航空機を迎撃していた。観測機も接近不能、視程距離での直接照準では熱線を受け、レーダー射撃は感知される。砲撃は困難だ」
「テートクー！」

「金剛、何か思い付いたか？」
「潜水艦による狙撃かＡｍｂｕｓｈ（待ち伏せ）はどうですカー？」
「魚雷のキャビテーションノイズと雷速から難しいだろなぁ」
「あの、提督…」
「ん？涼月か」
「弾道弾は…どうでしょうか？」
「弾道弾……いや、それはアリかもな……問題はどうやって奴に察知されないかだが……」
「司令官！」
「朝潮か、妙案があるのか？」
「砲撃や弾道弾以外の攻撃に釘付けにするのはいかがでしょうか？」
「ふむ……」
　ホワイトボードにＴＧＴと書かれたマグネットを貼る。そのマグネットを中心に放射状に矢印を引いて囲む。
「このぐらいの距離から完全に包囲した状態でトマホークを乱射して飽和攻撃すれば……更にミサイルの誘導装置からのデータをデータリンクして共有すれば……いや待てよ、弾道ミサイルの発射準備、今からで間に合うか……？」
「はーい！」
「何だ、夕張？」
「それなら、こんなものはどうでしょうか？」
　書類を渡してきた。
「なになに…？『戦艦用主砲の電磁投射方式の採用とそれに伴う新型弾薬について』何これ、俺知らないんだけど？」
「無断でやっちゃいました！」
「お前はよォ……まぁいいや」
　ペラペラと書類を見ていく。火薬と電磁石を組み合わせて初速の圧倒的な高速化とそれによる射撃精度と射程距離の向上が謳われている。また新型弾薬については戦車砲で用いられる１２０ｍｍのＡＰＦＳＤＳ弾を薬莢と装弾筒を換装して使用する事で弾体の共通化と射程延長を実現したと書かれている。

コレに賭ける価値はありそうだ。
「夕張、コレを大和と武蔵の分だけ用意する事は出来るか？」
「もちろんです！」
自信があるのか即答だった。

更にその後も議論に議論を重ね、最終的にこのような作戦となった。
輪形で大規模な包囲陣形をとり、航空機・通常艦艇による遠距離からのミサイル飽和攻撃で目標を迎撃に集中させる。
←
更にその外側から大和と武蔵で超長距離レールガン砲撃を行い、シールド発生装置を破壊
←
唯一用意出来た弾道ミサイルに気化爆弾を改造した特殊弾頭を搭載して高高度から攻撃、熱線の発射装置とポリ窒素弾の砲身を破壊
←
近距離攻撃で止め
すぐさま準備に取り掛かる。国連軍以外にもインドやオーストラリア等の軍にも協力を要請し、最初の飽和攻撃をより濃密な弾幕に出来るようにする。
作戦開始は明朝の正午となった。夜には艦娘を乗せたＣ―２やＵＳ―２、航空部隊への空中給油の為のタンカーが離陸した。
土屋も僚機と共に最終段階での攻撃部隊としてＡ―１０Ｓで出撃した。
このＡ―１０Ｓは、明石が開発したＡ―１０Ｃの改良発展型である。主翼を交換する際に、主翼の素材と内部構造を見直して軽量化と強化を行い、エンジンは基本設計はそのままにアフターバーナーを追加している。また電子機器の近代化とレーダーが追加された他、防弾構造の強化も施された。そして最大の特徴は、胴体下に装備された電磁投射砲だ。アークライトと名付けられたそれは、Ｘ―０２Ｓで採用されたものを改良して搭載している。砲身温度が一定以下、かつスー

パーキャパシタの充電量が十分であれば最大で４連射も可能な仕様になっている。固定式のため対地対空問わず使用でき、また艦艇をも撃ち抜く強力な貫通能力を持つが、効果範囲はほぼ点になるので命中させるには熟練の技が必要となる。物理的にはほぼ全ての装甲を無力化すると言われている。

徹夜で移動し、何とか作戦開始時刻には間に合った。
目標は深海棲艦部隊が引き付けているが、ほぼ壊滅状態にあるようだ。
しかしそのおかげで我々は安全に包囲出来たワケだ、その事に心の中で感謝する。
囮部隊を退かせ、艦艇や航空機から大量のミサイルが撃ち込まれる。あらゆる手段でそれを迎撃する無号機。それが数分続いた所で、遥か彼方から大和達の砲弾が降り注いだ。数発が迎撃されるものの、その巨大な速度エネルギーでシールドを貫通し、両肩の発生装置を破壊した。
間髪を入れず、気化弾頭の弾道ミサイルが飛び込んできた。見ると熱線の照射装置等の兵装が大きく破損していた。行けると確信した土屋は、専用の照準器でアークライトを撃ち込む。

４発の弾薬は初弾で無号機の耳から上を吹っ飛ばし、次弾で顎から上を弾き飛ばし、３発目で首から上を完全に消し飛ばした。最終弾で片足を膝上で切断した。
「こおれで行くかぁ?!」
しかし、目標は片足でも平然としている。
残された対空火器で濃密な弾幕を張る無号機。
それらをギリギリで回避していく。完全にかわせなくても弾薬は機体の塗装にキズを入れる程度で掠めていく。
翼下のＡＧＭ―６５を２発撃ち込む。対空火器がそちらに張り付いた瞬間に針路を変え、バレルロールアタックで機首のＧＡＵ―８を

２００発程射撃する。さらに機体を立て直すと上空を飛び抜ける瞬間にＣＢＵ―７１ナパーム弾を２つ投下する。目標は爆炎に包まれるが、この程度の火力ではと言わんばかりに片足で立っている。ＥＣＭポッドを作動させつつ急上昇し、太陽を背にして急降下する。そのまま２．７５インチロケットを一斉射した。片腕をもいだが、やはり致命傷にはならない。空のランチャーを投棄し、頭の無い首の断面に向けて再び機関砲を１５０発程度射撃して一度距離を取った。

―同時刻　土屋の交戦海域の東１０ｋｍ―

艦娘部隊は無号機の戦闘能力の喪失をもって止めの総攻撃を行う予定になっている。秋月型姉妹もその中にいた。

秋月「あの、青葉さん…本当に司令１人で大丈夫なんでしょうか……」

青葉「大丈夫です！一緒に飛んだ事があるので保証します！」

秋月「うーん……（嫌な予感がします…）」

土屋は考えていた。残された弾薬で如何にこの強敵を倒すかを。

無誘導爆弾、ナパーム弾、ＡＧＭ、ＦＦＡＲ、ＧＵＮ、ＥＭＬと試したが効果はイマイチ。燃料も帰投用を入れると残弾に対してかなりギリギリ、かと言って補給に戻る訳にも行かない。どうするか…

「悩んでもしょーがねーか…」

弾幕を躱しつつ接近すると、翼下の弾薬を全て撃ち込んだ。四肢を失った無号機は艤装の一部を残したまま海面に座り込んだ。爆煙が晴れ、その様子を確認した瞬間だった。

艤装の側面が開くと、何か擲弾のような物を打ち出した。グレネー

ドだ。それと同時に無線が入る。

▪秋月です！司令、援護します▪！

打ち出された弾は接近する秋月に向かっていた。

《おい、避けろ！》

直後、秋月が轟音と共に爆発に巻き込まれた。

《コロス……てめーだけはぜってー殺してやる！》

擲弾筒に向けて機関砲を撃ち込む。同時に対空機関砲に右主翼の外側半分を吹き飛ばされる。上空を通過すると残った右主翼のフラップを下げ、ＢＬＣ（境界層制御）を作動させると共にエルロントリムを素早く調整してバランスを整える。残った燃料を全て使い切るつもりでＡ／Ｂを使って急上昇し、スロットルを絞らずにインメルマンターンで突入する。そのまま急降下しながら機関砲とＥＭＬの

残弾を全て叩き込み、両足の間のレバーを引いた。
ベイルアウトだ。
機体は無号機に吸い込まれるように墜落し、座席と分離した土屋はパラシュートが作動した。
空中でパラシュートを切り離すと、艤装が全壊した無号機の真上に落下した。着地と同時にサバイバルキットのナイフを無号機の胸に突き立て、心臓の辺りを抉り取った。ホルスターから拳銃を抜くとその傷口に銃口を捩じ込み、心臓に向けて全弾射撃した。撃ち尽くすと拳銃を投げ捨て、ナイフと手で臓器を掻き出してバラバラに海に撒き散らした。最後に心臓を取り出すとそれを引き裂きいた。
「てめーに脊髄なんざ必要ねぇ…」
ナイフで脊髄を引き抜くとそれをへし折った。
すると残骸の中に灰色の箱を見つけた。液晶が付いており、何かのカウントダウンが進んでいる。カウントゼロまで残り2秒弱だった。

「し、司令が……そんな……」
ダメコンで救われ、海上にへたりこんだ秋月が見たものは、土屋が無号機をバラバラにした直後に残骸が大爆発した光景だった。遠くからでも分かる程の爆発で、どう見ても土屋は巻き込まれていた。
そこへ照月と涼月が合流した。
「秋月姉！大丈夫!?」
「司令が…そんな……嘘…秋月もすぐ行きます…」
「ダメーッ!!」
錯乱し魚雷の信管を叩いて自決しようとした秋月を2人が止めた。
「秋月姉、早くドックに…！」
「それよりも司令を！」
「涼月、提督を探してきて！これなら良い？秋月姉…」
「司令……」

涼月は現場に向かい、秋月は照月と共にＵＳ―２で先に帰投したのだった。それからも秋月は鎮守府まで泣き続けていた。

ＡＣＴ．１８　記憶を辿り

一面のダークブルーだ。
これは空か？
いや違う。
そんな高高度にいた記憶は無い。
ならば答えは１つ。
ここは海中だ。
何かの音が聞こえる。
所謂死神の足音なのか？
違う、これは探信音（ピン）だ。
つまりアクティブソナーを使う何かが近くにいるという事だ。
敵か味方か、それは分からない。
いよいよ探信音がすぐそばに来た所で土屋は意識を手放した。

蝉の鳴く真夏の日、懐かしい家が見える。
家から誰かが出てきた。
中２の時に亡くなったひいばあちゃんだ。
―おかえり、まったく暑いねぇ―
ガチガチに硬いアイスを渡してくれる。
そのまま庭でメダカを見ながらアイスをかじる。

懐かしい
あの頃が1番幸せだったのかもしれない
その後も記憶を辿るように色々な景色が見える。
初めての戦場、
黒金の巨鳥
初めて見た核爆発
かつての僚機から放たれるレーザー
空が砕けたあの日の夜空
そしてそれを迎え撃つ大砲
南国の島の上での大空戦
自分達を隕石のように攻撃する大砲
市街地上空の死闘
どこから撃たれたのか分からないミサイルで轟沈する味方艦隊
混合神経ガスが立ち上る街
砂漠の大規模戦闘
レーダー無しで逃げる練習機
岩盤を攻撃する戦闘機
混迷を極めた海
仲間達と飛び抜けたトンネル
落下する人工衛星
そして海面に落下したユリシーズから生まれた生物が人類を攻撃しているというニュースの画面
その専門対策部隊に配属された日
これが走馬燈か、やっとこれで休めるのか…
気付けば自分は何も無い闇に突っ立っていた。遠くに白い光が見える。あそこが出口なのか。戻ってもここに居てもしょうがないと思い、ゆっくりと光の方へ歩く。
その時、何かが背中に張り付いた。
だが不思議と驚かなかった。
むしろ何故か安心出来た。
それが何なのか誰なのか分からないが、引き戻そうとしてくる。

向きを変え、光とは反対側に歩いてみる。２０歩程進んだ所で足場が無くなり落下し、そのまま再び意識が無くなった。

「ッッ!!!」

あれは一体何だったのだろうか

窓の外からＦ―４のＪ７９ターボジェットエンジンの爆音が聞こえる辺り、どうやら夢から覚めたようだ。鎮守府のようだが、この部屋は見覚えが無い。

「知らない天井だ…」

そう呟いた瞬間、何かが胸に飛び込んできた。

「ひでぶぅっっ!?!?!」

「司令!!」

突然の事でモヒカンでヒャッハーな世紀末雑魚の断末魔ような声を出してしまう。

最初は誰か一瞬分からなかったが、声と胸に擦り付けられている頭ですぐに分かった。綺麗な黒髪とポニーテール、その結び目で揺れる高射装置…

「……秋月…」

両手にはギプスがされているので抱きしめたいのを我慢しつつ名前を呼んだ。
だが秋月は答えずにそのまま顔を胸に埋めたまま泣いていた。しばらくそっとしておこうと思った時、部屋のドアが開き、瑞鶴が入ってきた。
「あ、提督さん気がついたの!?おーいみんなー!」
他の艦娘達を召喚し始めた。
「提督さん、大丈夫?」
「今はな…まぁ怪我の程度が分からんから何とも言えんが…所で部屋が新しく出来てるように見えるが俺はどれくらい寝てたんだ?」
「えーと、一昨日でちょうど2ヶ月だね」
「ウッソだろマジで?」
サイドテーブルに置かれた腕時計を見てみる。この前の戦闘のせいだろうか、盤面にヒビが入っていたがデジタル表示は問題なく読めた。
「わーお……」
「あとね、秋月は毎日ここで提督さんを待ってたんだよ?何か言ってあげたら?ギプスももう外す予定だったし…」
瑞鶴がギプスを外した事で、両手の自由が戻った。
多少ぎこちない動きだが、両手で秋月を抱きしめる。
秋月はようやく顔を上げた。
「おかえりなさい、司令…」
「おぅ、ただいま…遅くなってごめんよ…」
「ホントです、遅過ぎます…もう帰ってこないのかと…」
「新婚なのに…辛い思いさせたな……」
「いえ…秋月の方こそ、ご迷惑をおかけしてしまって…あの時、秋月が勝手に動かなければ……」
「気にすんなよ、大丈夫だったか?」
「はい、入渠で治りました…」
「そっか、そら良かった…」
病室のドアが開き、他の艦娘達がなだれ込んで来た。そのままベッ

ドを取り囲むように集まってくる。
「あー、えっと…長い間寝てて申し訳なかった。皆には迷惑かけた。すぐに挽回出来るように全力を尽くしたい。それと、寝てる間にあった事を教えてくれないか？」
大淀が1歩前に出てくる。
「その、簡潔に言いますと…我々の勝利で戦争は終わりました。」
「……は？何それそこんとこ詳しく」
「はい、深海棲艦陣営は前回の無号機の騒動で大打撃を受けた上に我々が救援を出す条件として提示した作戦の中止等が合わさった結果、このまま戦争を継続した所で勝ち目が無いと判断し降伏しました。現在は国連軍監視の元で太平洋上の人工島に収容しています。」
「マジか……」
「ただ、1つ新たな問題が発生しました。これは、緊急の内容でもないので明日お伝えします。今日はゆっくりなさって下さい。」
「そうか…」
一通り話した所で、集合した艦娘達を見る。
1人、見慣れない顔を見つけた。大淀に聞いてみる。
「俺の記憶違いなら済まん、そこのピンクの髪の子は新人か？」
「あ、そうです。すいません、提督に自己紹介をお願いします」
「あたし、Ａｔｌａｎｔａ級軽巡、その一番艦、Ａｔｌａｎｔａ。防空巡洋艦Ａｔｌａｎｔａのほうが通りがいいかなあ。よろしくね。」
「アトランタか、名前からするとアメリカの艦娘だな。防空巡洋艦か中々頼れそうだ…」
「でもま、戦争終わったならあたしの出番ももう…」
「まぁ…それを言うなよ…烈風が可哀想だろ」
そんな話をしていると、鈴谷がある提案をした。
「提督も時間は掛かったけど無事戻ってきたし、せっかくだしお疲れ様＆ａｍｐ；提督おかえりパーティーしようよ！提督、見た感じ動けるでしょ？」
四肢と首を動かしてみる。多少関節が軋むがほぼいつも通りだ。

「あぁ、多分大丈夫」
「夕立も賛成っぽい！」
その他にも賛同の声が多く、結局今夜開催される事になった。
「では秋月も準備してきますね！楽しみにしてて下さい♪」
ぞろぞろと皆が出て行く。
だがアトランタだけはそこに居た。
「あれ、アトランタは行かないのか？」
「あたし…まだあんまりココに馴染めてなくて…あと、長いだろうからランタでいいよ」
「そうか……よし、ちょっと外歩くか」
「え？」
「俺と居れば皆話せるだろ？だから鎮守府の中をブラブラしてみないかって事だ」
「なるほど…ありがと」

静かな所の方が誰かと会った時に話しやすいと思い、とりあえず港に向かった。国連軍の艦艇が数隻停泊しているが、それ以外の船はなくとても静かだ。
岸壁に腰掛けて、ボーッと遠くを眺めてみる。

「何か見えるの？」
「いや、何も…ただ風に当たってるだけさ」
アトランタが隣に座った。
何となく鼻歌を口ずさむ。環太平洋戦争の頃にチョッパーから教わって気に入った「Ｂｌｕｒｒｙ」だ。
「提督さん、その曲…」
「あー、そういやランタはアメリカ出身だったな」
「うん。久しぶりに聞いたからちょっとびっくりしたんだよね…」
「ほーう、俺は空軍時代の同僚に教わったんだ…と、そういや久々に飛びたいな」

今度は格納庫へ向かう。７番格納庫に入ると、そこはＴ―４Ｖ練習機が並んでいた。
このＴ―４ＶはＴ―４練習機の大規模改修型で、アフターバーナーの追加に始まり、ＨＭＤやグラスコクピット等のアビオニクスの近代化、射爆訓練が可能になるよう各種兵装の搭載能力の付与とそれに合わせた機体構造の強化等の改修が施されている。練習機ならではの軽くコンパクトな機体による高い機動性も残されている。つまり実戦にも耐えうる性能を有しており、その能力は４．５世代機とは行かなくとも４．２世代機とは十分呼べるものだった。
「提督さん、どうしたの？」
「ん？機体を引き出す準備をしてるだけだが？」
トーイングカーで１機をエプロンに引き出すと、隣接する更衣室で着替えて機体に乗り込む。
「ちょっと、飛んで大丈夫なの？」
「まぁ派手な飛び方しなければ大丈夫だろ」
「えぇ…」
タキシングした機体がＡ／Ｂ全開で離陸して行く。
滑走路端で急上昇し、そのままハーフループして急降下する。滑走路の路面スレスレで引き起こすと一気に加速して鎮守府施設の真上に向けて旋回しそのまま近くの山の上を飛び抜け、再び旋回して滑走路周辺に戻って来た。ベイパーを曳きながら急旋回を繰り返す。
「派手な飛び方って……」
練習機とは思えない機動を見たアトランタは困惑した。目の前のそれが機体の性能なのか、はたまたパイロットの技量によるものなのかは分からなかったが。
だがあの自由で楽しそうに飛び回っているのを見る限り、彼にとっては陸や海ではなく大空こそが帰るべき場所であり彼だけの王国のようなものなのではないかと思った。
１０分程しただろうか、秋月がエプロンに出てきた。
「アトランタさん、さっきから飛行機の音が……あれ、あの機体飛ばしてるのってまさか…司令ですか!?」

「あ、うん…そうだよ、あんまり無理しないって言ってたけど…あ、下りてきたよ」
燃料が減ったのか着陸してきた。土屋が降りるとすぐに秋月が直行した。
「お、秋月どうしt…」

パチイィィィンッッ!!

秋月が土屋の頬を思いっ切り平手打ちした。

「司令の馬鹿！何ですぐに無茶するんですか！そんなに空が好きなんですか!?秋月の気持ちも知らないで…」
今度は抱きついて泣き始めた。
「司令にとっては、空って何なんですか…？」
「それは、その…何だろうな。1番の居場所というか、本来の家というか…帰るべき場所というか…」
アトランタの読み通りだった。地上と空中でのテンションのギャップを見て予想しただけだったが当たっていた。
「……空には、誰も待ってないのにですか？」
「……」
「……秋月はずっと待っていたんですよ？誰も待ってくれてない所に帰るのが良いんですか？」
「うぐっ…」
「秋月は、司令の帰るべき場所にはなれませんか？」
「そんな事は無い」
「では、これからは空ではなく秋月の所に帰って来てください。秋月も「鎮守府」ではなく「司令」の元に帰りますから」
「分かった…ただいま、秋月」
フライトスーツからハンカチを取り出して秋月の涙を拭き、機体を格納庫に入れて鎮守府に戻った。

パーティーが始まった。鎮守府の皆でビュッフェスタイルのパーティーだ。いざ皿を取りに行くとメニューを見て目が点になった。
自然薯に鰻、エスカルゴにスッポン…
伊良湖が近くに居たので質問してみた。
「なぁなぁ、このメニューって何か意味あるの？」
「提督の回復のため、というのが私達からのメッセージですね…あとは秋月さんの意見で…」

「あー、だから精がつくメニューに…」
「つまり、恐らく夜は…／／／」
「あーうん、大体察してる…ソッチの準備をしとけばいいんだな？」
久しぶりに俺が居るのが嬉しいのだろう。そうなるのも仕方ないと思った。
パーティーの後はやはり夜戦となった。